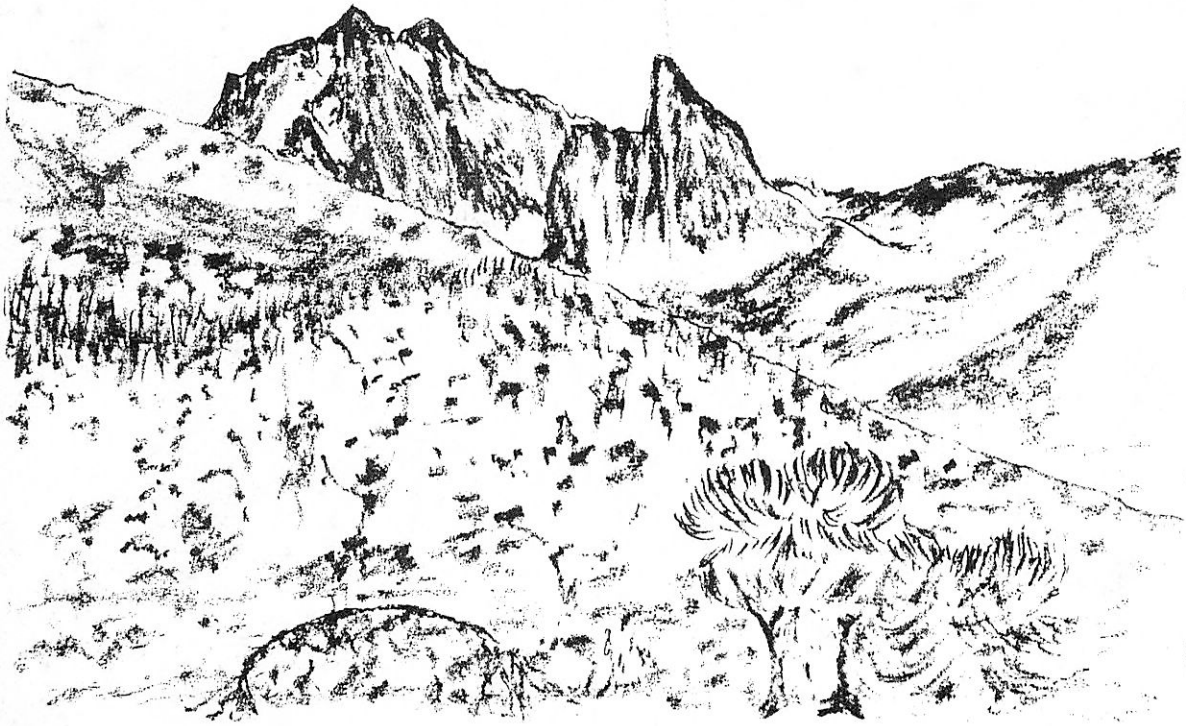
北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 27号

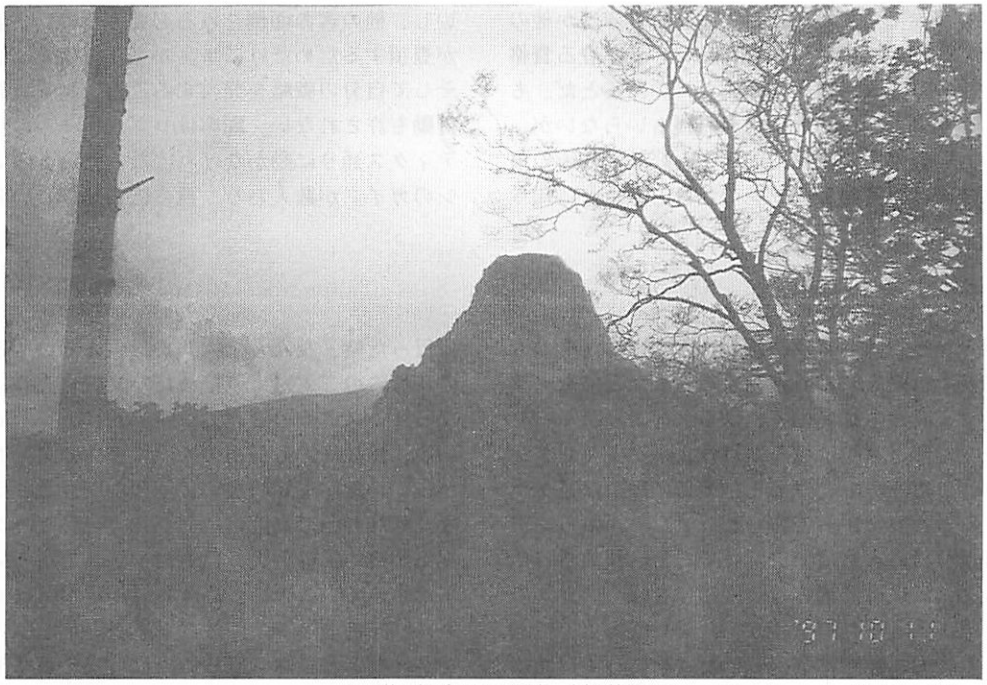
1997年10月～12月



ACC－J茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 97'秋 27号



下北半島の奇峰 縫道石山《photo by, Motozu》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

営業遠征隊

R&V２０号の“毒舌M氏の言いたい放題”でM氏が難波康子さんの遭難について触れている。ロブ・ホールの率いる営業登山隊“アドベンチャー・コンサルタンツ遠征隊”に７８０万という大金を払って参加し、エベレスト登頂後サウスコルで疲労凍死した件についてである。

この隊にはジャーナリストでバリバリのクライマーであるジョン・クラカワーという人が顧客として参加していた。彼の参加目的はアメリカのアウトドア誌「アウトサイド」から委託され、営業登山隊に自ら参加し、その実態をレポートするという仕事のためであった。ついでに登頂するという目的があったのは言うまでもない。ジョン・クラカワーは帰国後、著書“INTO THIN AIR「空へ」”という本で、この遭難についての詳細を明らかにした。

この本を読んでまず驚いたことは、ロブ隊ほか他の隊も含めて、顧客の中にはまだエベレストを登る資格がないと思われる人が数多く含まれていたことだ。もちろんエベレストを登るのに何の資格もいらないが、私の言いたい資格とは最低限の体力と経験と技術の事だ。登山技術はおろかアイゼンの着け方もロクに知らない程度の人もいたということだった。一方同じ顧客の中にもヒマラヤのベテランという人もいる。そういう人達が三位一体となってアタックするのである。いや、三位一体とは言えない、少なくともロブ隊においては。顧客達は同時に行動を起こしているが、パーティを組んでいるわけではない。自分を守ってくれるのは自分だけであり、頼りになるのはガイドだけである。営業遠征隊によって顧客の払う料金はだいぶ違うらしいが、ロブ・ホール隊が一番高料金だったようだ。しかし今までの経験実績からいうと、ロブ隊が登頂できる確立が一番高かったことも事実だった。ロブ・ホール自身も、体力があればどんな顧客でも頂上に案内する自信があったらしい。

ロブ・ホール隊に限っていうと、顧客は自分の事だけを管理すれば良い。荷上げをすることもなければ炊事をする必要もない。隊全体のことを考える必要もないし、他の客の面倒をみる必要もない。各顧客は自分が登頂するためだけにエネルギーを使えばよいのだ。そして自分の戦略を発言することも制限され、勝手な行動も許されない。顧客はロブ・ホールの決めたタクティクス通りに動かなければならない。隊にはベテランのガイドが数人おり、彼らは素晴らしい経歴の持ち主で、殆どエベレスト登頂経験を持っている。そのガイドが顧客と行動を共にし補佐する。また有能なクライミングシェルパも数名いて、炊事、荷上げ、ルート工作、キャンプ設営等は彼らが行う。クライミングシェルパが作ったルートを登ると、そこにはやはりクライミングシェルパによって作られたテントが張ってあり、顧客はそこに入ればいいだけである。決められたタクティクスに従って顧客は高度順化を行う。ロブの情報をインプットされたロボットと同じである。頂上アタックの時も、顧客は個人装備だけを持っていけばよい。サウスコルから頂上までの往復には、普通３本の酸素ボンベを使うようだが、既に南峰にはシェルパによって替えのボンベがデポされている。ヒマラヤトレッキングツアーをそのままエベレストサミットアタックツアーに持ち上げたようなものである。

“INTO THIN AIR”に難波さんのことは多く触れていない。難波さんより体力も技術も劣っていたと思われる者が無事帰還しているのは、それはただ幸運だっただけだ。１１人がサウスコルでビバークした後、一瞬の好天（というほどではないが）をねらって脱出した際、難波さんとウェザーズ（アメリカ人）の二人は、もうだめだという判断によりそこに置き去りにされる。メンバーの一人が明るくなってからビバーク地を確認に行った時、なんと二人共まだ生きていたという。その時もこの二人はもうだめだと又置き去りにされるが、ウェザーズはその後自力で脱出し、テントに帰還している。難波さんも最初の脱出のとき、同行できたら助かっていたかも知れない。不運というよりほかない。なにせ8000mの高度だ。“THIN AIR”なのだ。そこは空気が薄く、各個人、自分の事だけで精一杯なのだ。まだ生きていたのに、高度差０m水平距離４００mをもう一回往復して、難波さんを救出しなかったのはなぜか、などと疑問に感じるのは、我々が今下界にいるからであり、彼らを責めることはできまい。そんな中でもガイドとシェルパは、顧客のために頑張った様子がひしひしと伝わってくる。ロブ・ホール自身は、プロとして顧客を見捨てることができなかった。早い時点で動けなくなった顧客に見切りをつけ、一人で降りていたなら彼はかなり高い確立で生きて帰れたはずだ。ロブ・ホールはプロとして、顧客は全員生きて帰すという信念を通そうとしたのだ。途中から引き返す機会を見逃してしまったという重大なミスをしているが、自分の命をかけても顧客を見捨てなかった点には敬服する。

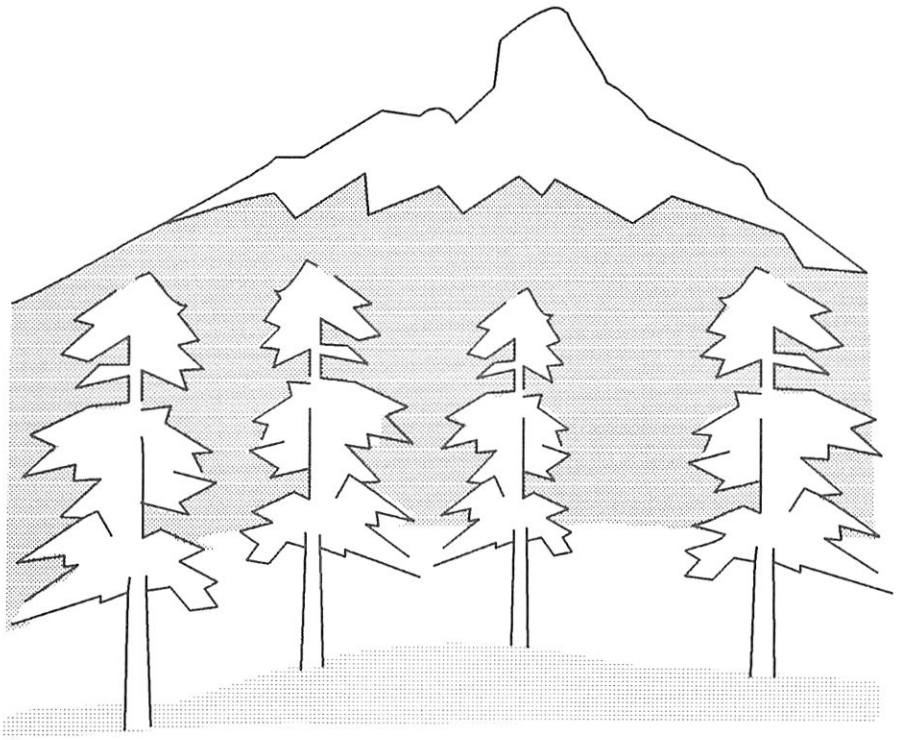
この遭難の原因は、顧客の質、ルートの渋滞、天候の急変ほか様々な要因が重なったためであろうが、私

はとりわけ顧客の質のことが頭にひっかかってしまう。幾つかの隊が同時にアタックしたので人数が多すぎたのは問題であるが、顧客の質が一定レベルに達していれば渋滞は最小限で済むし、悪天につかまる前にテントに帰れたかも知れない。一定レベルとはどの位か、またそのレベルはどのように判断するのか私にもわからない。ただアイゼンの着け方もよく分からない程度ではレベル以下であろう。セブンサミッツのうちエベレストが最後だというだけでもレベルに達しているとは言い切れないだろう。顧客は、金はあるけど体力も技術もない。だけどエベレストに登りたい。ガイドは自分の顧客を一人でも多くサミッターにしたいだろうし、またそれが自分の営業実績にもなる。当然無理してでも頂上に引っ張って行くことはあり得る。所詮どんな人でもあの高度では無理して登っているのに違いはないのだろうから。営業遠征隊は、体力も技術も組織もない人達をエベレストに登らせることを仕事にしていたとも言える。

実は私も後何年かしたらヒマラヤに行きたいと思っている一人である。仲間内で登山隊を作って行ければそれに超したことはないが、それができなければガイドの企画した登山隊に参加せざるを得ないだろう。私に何百万も支払う財力はないので、エベレストに行くことはないだろうが、国内外での準備等の煩わしさを考えると、ガイド利用の方が気軽であることは確かだ。でも、自分でルート工作も荷上げもしなかったら、頂上に登ったとしても、はたして満足感は得られるのだろうか、今はわからない。

“INTO THIN AIR”に出てくる営業遠征隊と、日本のガイドが行っている海外登山とはどう違うのか、又は同じようなものなのかは知らない。私が海外登山に行けるのはまだ何年か先だ。ゆっくり検討してみたいと思う。ただ言えることは、自分の愛した人や、気心の知れた山仲間の為に命を賭けることはかまわないが、遠征の時、初めて顔を会わせた人に自分の命を預けることができるだろうか、今の自分には自信がない。

（本図一統）



《目次》

１９９７年　秋号　１０～１２月　ＡＣＣ－Ｊ茨城

巻頭言　・・・　１
集会報告　・・・　４
山行報告　・・・　５
パキスタン・カラコルム紀行《後編》　・・・　６
ディラン・ラカポシＢＣトレック
はじめちゃんの想い出日記《Ｐａｒｔ１》　・・・１４
一ノ倉彷徨（はうこう）　・・・１５
黒伏山南壁の基部まで　・・・１５
下北・縫道石山　・・・１６
両神山塊・狩倉山　・・・１８
太刀岡山・正面壁　・・・１９
笛吹川東沢釜の沢　・・・１９
瑞牆山・十一面岩正面壁・春一番ルート　・・・２０
戸台川～千丈ヶ岳　・・・２１
はじめちゃんの想い出日記《Ｐａｒｔ２》　・・・２２
逆・深夜鈍行《前編》　・・・２３
友好山岳団体の月報・会報・その他　・・・３１
編集後記　・・・３３

表紙絵…マッキンダーズキャンプからのケニヤ山

集会報告

（於、スカイラークガーデン）

【１０月】

１０月　１日
　出席者　本図、古山、菊地、新美、坂本(恵)、告、高木、村上、木村、中居
１０月１５日
　出席者　本図、古山、木村、笹平、坂本(昭)、菊地、告、坂本(恵)
１０月２９日
　出席者　本図、古山、笹平、鯉河、木村、坂本(恵)　、菊地、紺野、高木、中居、坂本(昭)

【１１月】

１１月１２日
　出席者　本図、古山、菊地、坂本(恵)、笹平
１１月２６日
　出席者　本図、古山、菊地、告、笹平、紺野、坂本(恵)、生井

【１２月】

１２月１０日
　出席者　本図、菊地、木村、古山、鯉河、坂本(昭)、坂本(恵)、告、笹平、中居

１２月２４日
　出席者　本図、古山、菊地、木村、笹平、中居、告、鯉河、坂本(恵)

山行報告

《 １９９７年　１０月～１２月 》

【 １０月 】

１０月10～11日	谷川岳滝沢第三スラブ(中止)	Ｌ古山、告
１０月10～12日	下北・縫道石山	Ｌ本図、村上、坂本(恵)
１０月　１２日	黒伏山南壁の基部まで	Ｌ古山、中居
１０月　１９日	両神山・狩倉岳	Ｌ本図、高木、村上
１０月　２６日	《会山行》	
	太刀岡山・正面壁	Ｌ古山、笹平

【 １１月 】

１１月２～３日	笛吹川・東沢釜ノ沢	Ｌ本図、坂本(恵)
１１月　　３日	瑞牆山・春一番ルート	Ｌ古山、紺野

【 １２月 】

１２月20～21日	戸台川・本谷アイスクライミング	Ｌ古山、中居

パキスタン・カラコルム紀行《後編》
ニディラン・ラカポシＢＣトレックニ

１９９７．８．１５～２４
パーティ　Ｌ中村昌之、イムラン・ベイ、高橋健二、福永明子、生井一男

前編はイスラマバードからハバクンドまでのアプローチ編でしたが、今編はいよいよディラン、ラカポシ峰のベースキャンプ、タガファリまで行きます。広大なミナピン氷河、青く澄んだ空とディラン峰とその稜線のスカイライン、ラカポシ峰など大自然の醍醐味を感じられるトレッキングでした。

では、パキスタン・カラコルムトレック後編を始めましょう。

８／２０。５：３０起床、ポーターが洗面用のお湯をテントまで運んでくれたので、さっそく洗面及び歯磨きをする。こんな優雅な待遇を受けられるのもまたトレッキングの良い処である。
『あぁ、さっぱりしたぁ、気持ち良いなぁ』
と独り言を言いながら早朝のハバクンドを撮影しようと、一人テントの外に出てみるとイムランがシュラフで外で寝ていた。雨が降らないので、この方が快適かも知れない。私がビデオカメラを回しながら近づくと、気づいたようでシュラフから顔を出してきた。私はすかさず顔を見ながら
『シャンバヘェ～ル』
と朝の挨拶を交わすが、言葉が違うらしくイムランは首を振りながらにゆっくり
『スババヘ～ル』
と言い直してきた。“あっ”そうかと今度は
『スババヘ～ル』
と言い直すと、どうも私の発音が良くないらしく、イムランは今度は喉を指で押さえて
『スババヘ～ル』
と笑いながら挨拶をして来た。私も喉を押さえて
『ズババヘェ～ル↗』『ズババヘェ～ル↘』
と喉の押さえ方を変えながら返したら、これがまた彼にはうけたらしく腹を抱えて笑っていた。こんな事から気持ちが近づいてくるのである。コミュニケーションとは言葉だけではない。と、私は思っている（負け惜しみみたいだが）。

そしてビデオカメラをハバクンドの放牧地、林の中のテントサイト、雪を頂く山々にパーンしていると、沢で顔を洗ってきたのか？福永さんが放牧地をこちらに登って来た。彼女の方にカメラを向けると、彼女も分かったらしく、手を振りながら喉に手を当てて
『スババヘ～ル‥』

モレーンのピークよりディラン峰を望む

と挨拶を交わしてきた。私もまた喉を押さえながら
『ズババヘェ～ル』
と答えると、彼女は笑いながらテントの中に入っていった。やっぱり私の発音はちょっと違うのかな？。

他のテントの人達も、もうすっかり起きて朝食を食べているようである。我々も朝食の準備が整ったのでテーブルについて、朝の清々しい空気を調味料に美味しく朝食を戴く。仲間と語らいながら楽しいブレックファーストである。

食後のティータイムも終わり、ポーター達もテントの撤収も終わりすっかり出発の準備が出来たようだ。

私は出発前の準備運動にと、空手の組手の真似をして体の柔軟をしていたら、イムランが妙なカラテの構えを見せながら、
『ヘイ、ユー、カラテ、カラテ』
と近づいてきた。私のやっている空手の真似事に興味があるようである。私は空手の経験は無いが、先輩に有段者がいたので色々教えてもらい一寸は知っていた。それじゃと正拳づきから懐に入り体落としで相手を倒し一撃を加える、といった事の手解きをしてあげた。ある程度のみこめた様なので、私の体で試してもらったりして遊んでしまった。やはり若いイムランにはこんな肌と肌の触れ合いが面白いのだろうか？、結構楽しんでやっていた。

準備運動も終わり、体も温まってきたので緑豊かな放牧地ハバクンドを８：００に出発する。

出発時間はどのパーティも同じみたいで、隊列を組んでハバクンドの放牧地を羊を追いながらトレースを登って行く。昨日と違って緑の多い林の登りであり、緑の林があるだけでもかなり登りが楽に思えてくる。体も２日目とあって慣れてきたのだろうか、今日の登りはだいぶ楽に登れた。登行ピッチも昨日より上がってきて２時間位でミナピン氷河モレーンの頂上へ辿り着いた。ピークに着くといきなり視界が開け、すると雪を頂くディラン峰とその稜線がまるで屏風の様に凄い迫力で迫ってくる。来る前に写真で見た光景なのだが、実際に肉眼で見ると迫力が断然違う。天気もよく雲ひとつ無い快晴だ。そしてその稜線をず～っと右に視線を動かしていくとラカポシ峰が現れた。澄み切った青空というキャンバスに繰り広げられるディラン、ラカポシの協奏曲。
『素晴らしい！成程、これがパキスタンの山々か！』
と心底感動した。フッと足下を見るとモレーンの下にはミナピン氷河が迫ってきている。氷河はずっ～とディラン、ラカポシ峰まで氷原の様に広がり、余りのスケールの大きさに別世界にワープしたような感じがした。この素晴らしい景観に、私は体中に鳥肌が立つ程感動してしまった。もう心臓はバコバコ、震えが来る程だった。もともと心の洗濯ぐらいに思って軽い気持ちで参加したトレッキングで、こんなに感動するとは思わなかった。半ば山を見る観光気分で来たのでその反動は大きかったと思う。

ここで、ようやくパキスタン及びパキスタンの山にはまってしまった人の気持ちが解かった気がした。
暫く、ここで休憩し写真撮影をしてから、モレーン脇のガレ場を横断しタガファリへ。ここのガレ場の横断が足を滑らせたら命はないという場所でけっこうスリルがあった。

１０：２５、今回の旅の終着点であり、また北杜夫の小説『白きたおやかな峰』で有名なディランのベースキャンプ、ダガファリにようやく辿り着いた。

我々は早速荷物をキャンプサイトにデポし、モレーン頂上まで登り、モレーンからディラン・ラカポシを撮影しに行った。今日は楽な工程だった。成程これならミナピンから頑張れば一日でタガファリまで登ってこれるだろう。本当に楽なトレッキングであるが、感動は超一級品である。天気は相変わらず最高で雲一つ無くクリアーで、屏風の様に目前に立ち塞がるディラン峰の稜線のスカイラインが奇麗に出ていた。青空というには余りにも濃い澄み切った青であった。

ポーター達の頑張りでテントも設営が終わり、青空の下で昼食を頂く。テーブルの上にはコック長が腕によりをかけた料理が並ぶ。この料理長がまだ若くイムランと同じ位の歳だろうか？。大したもんだ。海外に来るといつも感心させられる。

昼食後は、各自フリータイムになった。私はテントに戻って昼寝でもと思ったが、持ってきた本を取り出し読書タイムにする。１時間位本を読んだ頃
『生井さん！起きてますか？』
と中村さんが声をかけてきた。
『あっ、はい、起きてます。何でしょう』
『よろしければ２人で、氷河の所までモレーンを登って行ってみませんか』
『あっ、はい、わかりました。行きましょう』
とカメラとビデオを持ってテントの外に出る。

二人してモレーンを登り、モレーンのトレースを辿って行くと氷河に行っているトレースがあったのでモレーンを下降し、ガレ場を氷河帯に入る。氷河帯をしばらく行った所で、私は氷河の中の小さな沢を一人渡り、氷河の上に出た。中村さんは、アイゼン無しではちょっと不安だとついて来なかった。氷河の上に登ると、氷河の白色の広大な眺めの先にディランとラカポ

氷河の上からラカポシ峰を望む

シの峰が真っ青な空をバックに浮き出てくるように見える。後を振り返ると遠くフンザの村、そしてウルタル峰が見える。暫くは一人でこの広大な風景に身をおいた。本当に良かった。心からこの眺め、景色に感動してしまった。それもこの広大な氷河の上には私一人。う～ん言葉が出ない。この思いは体験した人でなければ解からないと思う。山を知らない（興味ない人）人たちは

『何をそんな簡単に行ける所で、頂上も踏まない、ハイキングのような事をして何喜んでんねん』

と言う人がいるかも知れんが大きなお世話である。悔しかったら一度来てみろと、負け犬の遠吠えを一吠え『わぉ～ぉん！』。

中村さんはガレ場をず～っと先まで行ってビューポイントを探して撮影してきたようだった。流石はプロのカメラマン、何か良い写真が撮れたのだろう。私とは感性が違うのだと思う。お互い良い撮影が出来たので、後は一路キャンプ地まで戻る事にした。

キャンプ地に帰って一休みしてると、高橋さんの体の調子が悪いらしく？福永さんが中村さんに、

『すみません。バッファリンありませんか？』

と言ってきた。多分、軽い食当たりかも知れない？、現地の水を少し飲んでしまったと言っていたのでそのせいかも知れないと話していたが、中村さんはちょうど持合わせが無いようなので、

『バファリンだったら、私が持っていますよ。これを使ってくださいよ』

と私が持っている物をあげた。すると彼女は

『助かります。大人は一回２錠だったですよね、遠慮なく戴きます』

と言ってテントに戻り、彼に飲ませたようだった。

彼も夕食の時間になったら良くなったみたいだ。でも食事は彼だけお粥である。お粥を見ていて我々も何か日本食が食べたくなってきた。

『それじゃ、皆さんもいかかですか』

と中村さんが用意した日本食をいただいた（カップラーメン、味海苔、雑炊、梅干し、塩辛など色々なものが用意してあった）。私は梅干し、塩辛、カップラーメンが本当にうまくまく感じた。イムランにも食してもらおうと、塩辛、梅干し、ラーメンにトライしてもらったが、梅干しには、顔を崩しすっぱそうにして頭を抱えていたのが印象に残った。

食後、また恒例のイムランとの座談会。相変わらず私は聞き役だが、いつもの話し相手の高橋さんは調子が悪くテントに戻ってしまったので、イムランは私の方に話を振ってくる。もう、しどろもどろの会話になってしまう。どうにもならなくなる頃やっと中村さんの助け船が出る。私の先生達は本当に厳しい。今回の旅はトレッキングより英会話習得が緊急な課題になってしまった。

座談会も終わり、各自フリータイムになった。私は一人テントの外に出て、星の観測をする。中村さんも星空を撮ってみようと、カメラのシャッターを開放状態にし空に向けていた。空を見上げると満天の星、余

りの多さに星座を探すのが難しい。それでも慣れてくるとなじみの星座が解かってきた。まずは夏の大三角形。わし座のアルタイル、白鳥座のデネブ、琴座のベガと見つかり、北斗七星、カシオペヤ、北極星と解かってきた。そうすると方位も解かってくる。成程、あっちが北か？と星空を見ていると、またイムランが近寄ってきて

『夜になって冷えてきたが、寒くないか？。何だ、星を見ているのか。あれは何という星だ！』

と話しかけてくる。

『氷河が近いからか、ちょっと寒いかなぁ』

と言うと、彼がかけていたモーフの様な防寒着（ポンチョみたいな）を私にかけてくれた。

『いや、このくらい大丈夫だよ』

と防寒着を返そうとすると、

『俺は慣れているから大丈夫だから、気にするな。いいから使っていろ』

と言うので遠慮なく借りておく。彼も私と話しがしたいらしく、何かと聞いてくる。またもや、私はしどろもどろ状態になってしまう。言っている事は、大体わかるのだがそれに答える単語が出てこない。う～ん？こりゃ何とかしなっくっちゃいけないな。この次来る時までには必ずペラペラとはいかなくても、どうにかコミュニケーション（言葉に因る）がスムーズに出来るようにならなくてはと強く思った。

夜も更けて来たので防寒着をイムランに返して、一人テントに戻り就寝した。

８／２１。５：３０起床、顔を洗いさっぱりして少し寛いでいると朝食である。本当に大名山行である。飯の用意も、食器も、お茶も、デザードまですべて彼等が用意してくれるので、私はただ指をくわえて待っていればいいのである。これじゃぁ、日本に帰っても今までの様な山行は出来なくなるんじゃないかとちょっと心配になってくる。

相変わらずの好天の中、出発かと思ったらイムランが帰りのコースは３つのコースがあるが、どうするかと聞いてきた。最初のコースはラカポシ峰の手前のモレーン沿いのトレースから尾根に上がり、尾根沿いを戻りながらハバクンドに戻るもの。二つ目は昨日横断したガレ場の手前から尾根のピークに上がり、尾根を越えてハバクンドに戻るもの。そして、最後は来た道を戻るという事だった。結局、最初は長いし最後は同じコースだしという事で二つ目のコースに決まった。

８：４５、タガファリを出発した。モーレン脇のガレ場の手前から尾根に取り付き、尾根を越してハバクンドに行く。イムランの話だとこっちの方が近道だというので、急登を登り尾根のピークに辿り着く。ここからの景色もまた最高で、前にディラン峰、横にラカポシ峰、後ろにウルタル峰、フンザの村と３６０°の景色である。ここで一息入れ写真を撮ったり、行動食を食べたりして満喫した。十分に休憩を入れたので

『さあ！頑張って行こう！』

と出発する。尾根ぞいに道を下降して行き、樹林帯の中を下降して行くが、途中で何か沢に降りてしまうような感じだったのでちょっと不安だったのだがやっぱり出てきてしまった。ガレ場の下降である。下の沢まで一気に落ちている。まるで滝谷のＢ沢の下降の様でとても大変な下降になってしまった。私は何とも無いが、他の３人は大丈夫だろうかと心配してしまう。

まずは、高橋氏が足下がおぼつかないガレ場を下るが、ズリズリと滑っては落石を誘発して大変であった。ともかく慎重に安定した所まで下ってもらい、落石が来ない方まで逃げてもらった。続いて私が降り、落石が来ても大丈夫な位置で、福永さんが降りて来るのを待つ。上からはイムランが

『危ないからもっと岩の影に隠れてください。大丈夫ですか？、気をつけてください』

と叫んでいた。イムランも私が大丈夫な所にいるのが分かったようで、下降を開始した。降り口が急でガレているので彼女の顔は緊張と恐怖の為か強ばってきていた。ズリズリと滑りながらもイムランのエスコートで徐々に降りて来た。私の所まで来たので、私がその先をエスコートすると目で答えて、イムランと交代し、イムランは中村さんの所へ戻った。イムランが中村さんを、私が福永さんを誘導して降りていった。

『ここの下降は、二駆じゃなく四駆で降りなくちゃ駄目だ』

と手足を使って降りる方法を教えながら降りる。しかし急な斜面で滑りやすいので、彼女はズリズリと滑ってはジーンズを埃だらけしていた。半分ぐらい降りて来ると、かなり傾斜も緩やかになってきた。福永さんの顔にも緊張に色が無くなってきた。もう安心だ。下を見ると高橋さんはもう沢まで降りていた。そして５人とも無事沢まで降り立った。

後での話だが、楽だが長いコースとスリリングだが速いコースと、どちらがいいとのイムランの問いに、福永さんがスリリングな方がいいと言ったのが、このコースの選択原因だと言っていた。ともかく無事に降りられたので、よしとしよう。

その後は沢筋に少し下り沢を渡り、カール状の緑の多いの谷の下山道を行くと、暫くしてハバクンドの放

牧地に着いた。何だか素直に来た道を戻った方が速かった気がするなぁと思ったが、中々こんなスリリングなコースをツアーでは来れないだろうからと皆満足げである。こんな思いが旅の思い出としては強く心に残るのだろう。後は来た道を戻ってミナピンまで下降して行った。しかし相変わらず乾燥地帯の下降。普通なら下降は余り水はいらないのだが、体からどんどん水分が飛んで出てしまうようだ。相変わらず、高橋氏は下りも早い。後の４人はゆっくりである。私と福永さん、しばらく遅れて中村氏とイムランと下りはばらけての下りになった。福永さんと今までの山行とか、山登りを始めた動機なんかとか色々な話を話しながら楽しく下る。下りもあとワンピッチ位かなという所まで来ても後続コンビが来ないので、私が気になってしまって福永さんに先に行ってもらい、中村氏、イムランを待つ。別に私が心配する事も無いのだが、性分なのだろうか？気になってしまうのである。暫くして中村さん等と合流し、イムランに先に下ってもらい、中村さんとゆっくり下る事にした。へとへとになりながら、来た時にも休んだ登りの出だしの渓谷の橋にたどり着いた。しかし先に行ったイムラン、高橋、福永の姿が見えない。どうしたのだろうか？と疑問に思いながら、橋に近づいて行くと、橋のたもとで座り込んでいた。

『ここから吹き上げて来る風が、とても気持ち良いんですよ。ここ、ここから顔を出してみて下さいよ』
と高橋さんに誘導されて座ってみると沢から吹き上げてくる風が冷たくすごく気持ち良かった。ここで少し休憩後、ここから先はもう殆ど水平歩道なので、４０分ぐらいでミナピンに着くだろうとまた歩きだす。

リンゴの林を通りながら、小川の道を黙々と戻っていると遠くから私達を見つけた子供たちが
『バイ、バ～イ！。バイ、バ～イ！』
と大声で声をかけてきた。一度答えたら「バイ、バイ」コールが止まらなくなったので、私はこれ以降は、あえて無視して歩いていた。

リンゴの林を抜けると民家が見えてきた。そして喉がガラガラのなった頃、ようやくミナピンに辿り着いた。ミナピン到着、１４：３５。早速ロッジのリンゴの木陰で椅子に座って休憩する。すると、
『はい、生井さん。さっきあげようとしたのに先に行ってしまったから』
と福永さんにリンゴをもらった。このリンゴもどうもさっき村に入った時、子供が売っていた物を買ったものらしい。私も彼女が買っていたのは見ていたのだが、早く水が飲みたくて早足で来てしまった。ちょっと虫が食っていたが、けっこう旨かった。こうして一緒に山行してると、本当の妹の様に思えてきて不思議な感じだ。彼女も中村氏も高橋氏も、何か見覚えのある気がしてならない。何処かで会ったような錯覚を感じてくる。

ここで早速、喉の渇きをいやす為に私達は立て続けに各自、炭酸飲料２本とミネラルウォーター１.５ℓを飲んでしまった。それほど喉が乾いていたのだった。

喉の渇きもいえ寛いでいると、我々の後からリンゴの木陰に来たパーティ（日本人のやはりトレッキングのツアー団体で５～６メーター離れた所で休んでいた）が何やら騒がしくなってきた。どうも一人のおっちゃんが何か言っているみたいだ。我々はガイドを入れても５人しかいないのに、その団体は１７、８名はいたろうか？。その円陣の中で女の子を相手に、何やら皆の前で怒鳴り散らしている。最初、我々はそのおっちゃんがツアーリーダーで彼女はサブか何かかで、きっと彼女に何か不手際があって、彼女を怒っているのかと思っていたのだが、余りにもひどい言い草なので、我々は、彼に聞こえる様にそ～っと（ささやき戦闘開始）
『何も皆の前で、怒鳴らなくてのいいじゃない？。
そんな事は彼女と２人の時に話して注意すべきで、皆の前で辱しめる事は無いんじゃないか！』

『そうだよねぇ、皆の前で言うなんて彼女が可愛そうだよねぇ。いいさらしもんじゃないか』
と我々はささやいていた。

でもよくよく聞いていると、その話の内容が掴めてきた。どうもあのおっちゃんはお客で、彼女はこのツアーのコンダクターみたいらしい。話の内容はどうも帰りの飛行機が成田に着くのが最終になるので、電車が無くなってしまうので怒っているようであったが、本当は何を怒っているどうか？はっきりした事は分からなかった。多分、飛行機が遅れれば、帰りの足が無くなってしまう。そんな事も考えずに、ツアーを組んだんだという事を怒っているようであった。見ていると怒っているのは彼一人みたいで、あとの人達は何も言っていない様に見受けられた。その中で彼女は平謝りしては大丈夫です。と言ってなだめているのだが、必要に彼女を責めている感じであった。そんな光景を見ていて私は段々気分がいらいらしてきて思わず
『あぁ、みっともねぇなぁ！。せっかく良い気持ちでトレッキングしてきたのによぉ、下に来て嫌な物を見ちまったなぁ、男だろ！女の子相手に大人げないなぁ。折角、異国の国に来たのによぉ、もっと大らかになれないんかよ、まったく、タコが～』
とまた聞こえるように、そ～っとささやいたのであっ

た。するとやはりおっちゃんにも聞こえたらしく、こっちを気にしているようであった。暫くすると声のトーンが小さくなり出した。そして、我々は彼女の援護射撃をするが如く

『大体、ツアーをよく吟味してから参加するよネ。帰りの飛行機が遅くなるのは来る前から分かっていたのだから、ここで文句いったって仕方ないじゃ無いか。これだけの人数を見ているんだから彼女は彼女なりに精一杯の事はやっていると思うよね』

とささやき戦法で彼に攻撃を加えた（聞こえるようにそ～っとネ）。すると彼のおっちゃんも戦意が喪失したのか、それとも言いたい事をすべて言ったので気持ちが納まったのか、トイレに立っていってしまった。彼女も我々のささやき攻撃の援護が分かったのか、時折じ～っと我々の方を見つめていた。その瞳には感謝の気持ちが込められていた。

ここミナビンで十分に休養したので、迎えのジープに乗り来た道を辿りフンザに戻った。

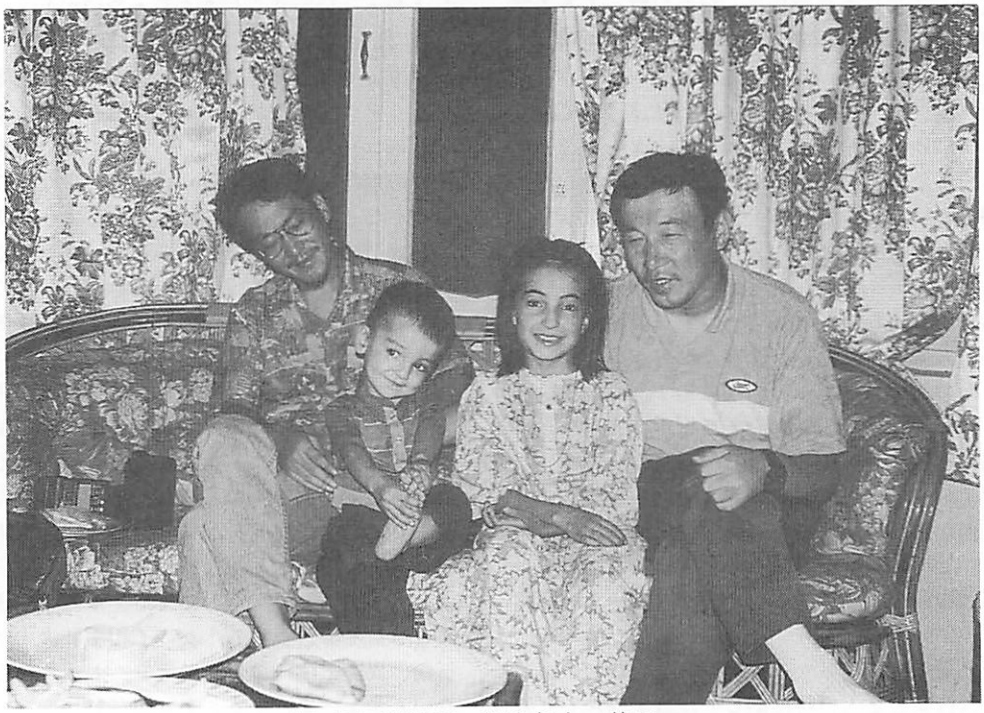
１７：３０、フンザ到着。帰る道すがら、今日帰ってから家に遊びに来いと、イムランに招待された。ホテルに１８：３０に迎えに行くから準備していてくれと言って、イムランはフンザにある家まで帰って行った。

ホテルに着き自分の部屋に戻り、早速シャワーを浴びて体に着いた埃をとる。着替えて、すっきりした後ロビー行き暫く待つと、中村、高橋、福永と現れ３０分遅れてイムラン登場。服を着替えてパキスタンの民族衣装で現れた。やっぱりよく似合う。では行こうと、ホテルの外に出てみると４ＷＤの車があったので、これで行くのか？“うわぁ、凄いな”と思ったら、それでは無く、その向こうの軽の乗用車だった。彼の軽自動車に乗り、彼の家まで向かう。途中、坂道を上がれないというハプニングもあったが、車を降り、押してクリアーする。車で走って気がついたのだが、我々のホテルは町外れにあるようで車で町の中を走ると、色々な商店やレストランが沢山有った。そうこうするうちにイムラン邸到着。イムランの家の人達が出迎えて歓迎してくれた。家に入ろうとすると、床に奇麗なじゅうたんが敷いてあった。我々日本人としては土足では上がれない。

『そのままでいいから、上がってください』

と言っているが、あまりに奇麗なじゅうたんを靴で汚すのが心苦しく靴を手に持ち上がらせてもらった。

ゲストルーム的な感じの部屋でチャイ、グリーンティ、パイ、クッキー、ポテトフライ等いただく。彼の家の子供達がまた可愛い。女の子は特に可愛いかった。３才ぐらいの男の子。４才ぐらいの女の子。７才ぐらい女の子とみんな可愛いくお茶目である。子供が大好きな私は、名前を聞いたりと直ぐにちょっかいを出し、３人とも手懐けてしまった。もう私の回りには子供達が座っていた。そのうち家族の人達が出てきた。その都度イムランが家族を紹介してくれた。そして最後にお父さんが登場。やはり風格が有り、長老といった感じだった。



イムラン邸にて‥姪＆甥と一緒に

『ハロー！、ハゥドゥユードゥ』
と我々全員に挨拶を交わし、大きな椅子に腰を下ろした。長と言った感じで、やっぱり親父はこのくらい威厳がなけりゃいけないなと思った。日本の親父も見習うべきだと思ってしまう。一家総出という感じで部屋は人で一杯になった。中々普通の旅ではその家庭までお邪魔し、交流する機会が無い。本当に貴重な体験をした。そして楽しいひと時を過ごし、ホテルに戻った。

ホテルに帰って夕食を戴いた後、ホテルの屋上パレスでパキスタン・ダンスをやると言っていたので見に行くが、ダンスよりライトアップされた城（バルチット・フォート）か奇麗で幻想的だった。ダンスを見ていたら横から福永さんが、
『生井さんも一緒に踊りたいみたいですね、生井さんなら出来るでしょう』
と笑いながら話しかけてきた。彼女も大きな勘違いをしている。私はそんなお調子者でも無し、度胸もない。本当はとても小心で臆病者なのだ。唯それを悟られないように誤魔化しているだけなのに…？。私は誤解されやすい人間なのかも知れない。

今日は結構疲れたので、部屋に戻りすぐ寝てしまった。

８／２２。まだ皆が起きてこないが、一人ロビーに向かう。途中ロビーに上がる階段で、パキスタンの民族衣装を着た奇麗な女の人とすれ違った。私は思わず
『グッドモーニング！』
と朝の挨拶絵をしたら
『お早ようございます』
と日本語で返事が返ってきた。“あれぇ”ともう一度良く顔を見るととても奇麗な日本の女の人だった。
『あれぇ、日本の人だったんだね。民族衣装が様になっているんで分からなかったですよ』
と声をかけると彼女は
『有り難うございます。これが着たくて持ってきたんですよ。似合いますか？そうですか。昨日着いたんですか？。私たちも昨日着いたんですけど。あなたは今日はどちらまでですか』
『私は今日は、ギルギットからベッシャムまで行く予定です』
と少し話して彼女は部屋のほうに戻っていった。

後でロビーで会うと、彼女はツアーコンダクターだったみたいでお客さんと一緒にいた。彼女が民族衣装を着ているので何人かと記念写真を撮っていた。奇麗な人だったので、私もあの時一緒に記念写真を撮っておけば良かったかな？と、そんな光景を見ていてちょっと悔いが残った。

フンザ８：１５出発。ディラン・ラカポシを眺めながらワゴンは、カラコルムハイウェイをラーワルピンディまで戻っていく。例の崖崩れの場所でワゴンと運転手と別れ、徒歩で渡るが前より幅が広くなっていて、角材の橋が増えていた。相変わらず小さい土砂崩れが起きているので駆けるように通り抜ける。道路に這い上がり、来たとき乗ってきた車を探しながら道を歩いて行くと、懐かしいあのタウンエースの運転手が私を見つけ手を振っている。
『元気だったか！山はどうだった？』
とみんなと握手しては抱き合う感動の再会である。懐かしのタウンエースに搭乗して、ちょっと頑張ってチラースでは無く次の日が楽になるようにベッシャムまで戻る事にした。

１８：３０、ベッシャム到着。今回のトレッキングは、車での移動距離が長いのがのネックであった。移動の方法としては、スカルドまで飛行機が飛んでいるで空路を利用するという計画もあったのだが、天候、予約状態で乗れる確立が極めて低いという事で車の移動になったのだった。まあ、これも良い経験ではあったが。

ここ、ＰＴＤＣモーテルはインダス川の流れが一望できるハイウェイの脇にあり、朝夕の風が涼しく快適であった。川岸にはベッドが用意してあり、現地の人らが外で寝ていた。夜になっても暑苦しい家よりここの方が快適に眠れるという生活に知恵なのであろう。

８／２３。ベッシャム７：３０出発、カラコルムハイウエイをラーワルピンディまでひたすら戻る。途中、道端をこっちに歩いて来るらくだを発見。福永さんが思わず『うわぁ、らくだ！。らくだ！』と騒いだのでイムランが気を利かせて車を停めて、らくだ使いに頼んで乗せてもらう。しかし、近くで見るとデカ～イ。立ち上がったら振り落とされそうで、危ないのでらくだに座ってもらい股がっただけだった。その後、象が歩いて来るはで一体ここは何処？てな思いがした。途中、休憩をいれながら順調に進んで行く。そしてインダス川とも別れると、町並が多くなってきた。イスラマバードに入ると今までと違ってホテルや色々な建物が立ち並び、都会に来た感じがする。そして遠く長かったドライブもようやく終わりを迎えた。

１８：２５、ラーワルピンディのパールコンチネンタルホテル到着。ホテルに入るとロビーのソファーにミナピンで騒いでいた例のトレッキングツアーの女の子（コンダクター）が座っていた。我々がロビーに入

るとすぐに気がついたようで向こうから
『こんにちは。どうも、またお会いしましたね、トレッキングはどうでした』
と挨拶をしてきた。
『すごく良かったです。奇遇ですな。またお会いするなんて。やっぱり私たちと、帰りの飛行機は一緒なんですね』
と言い、バザールの事とか色々と情報交換を話し、
『じゃぁ、明日空港でまたお会いしましょう』
と言って別れた。

彼女も我々の事を覚えていたんだなぁと思いながらチェックインを済ませ、荷物を部屋に置いて、ラーワルピンディにあるバザールに出かけお土産を見に行くが、バザールの場所が分からないので、ピンディの町の中をうろうろしてしまった。仕方ないと、一旦ホテルに戻ると、機内で一緒になった女（中年）３人パーティと偶然出会った。中の一人がパキスタン通なので、彼女のナビで、今度はイムランも一緒にバザールまでワゴンで行く。そこはまるで東京のアメ横の様に店が立ち並び、車が往来していた。私はイムラン、中村氏と３人であっちこっちとショッピング＆物色して回った。一通り見終って高橋、福永、女３人パーティと合流し、ホテルに戻った。

８／２４。朝４時に起床。ホテルを７：５５発のＰＩＡに搭乗する為４：３０に出発し、イスラマバード空港に行く。来た時とは違い空港施設は大混雑で、４列５列と人の列が出来ていて、どんな風に列が並んでいるのか分からない。搭乗口で二列になる様なのだが、どんな順で動いているのか？何がどうなっているのか全然分からない。見ているとパイロット＆クルーも同じ搭乗口から入っていた。この日はたった５便しかないのにこの有り様である。そんな状態なので我々の乗るＰＩＡ便のフライトは１時間遅れになり、８：５５発になってしまった。ともかく無事に乗れたので良かった。

帰りの空路からナンガーパルバット、デイラン、ラカポシ、Ｋ２らしき山が見えたが、はっきりわからなかったのが残念だった。途中飛行機の窓から名前は分からないが、延々と続く砂漠か見えていた。こんな所でも人は生きているのかなぁとぼ～っと眺めながら今回の旅の終わりを感じていた。

ＰＩＡ機は順調に２１：５５、無事成田空港に到着した。

今回も色々ハプニングがあったが、無事帰国する事が出来た。致命的なハプニングでないので、結構楽しいものだった。

帰国後、テレビのニュースで、神奈川ヒマラヤ登山隊がカラコルムのスクルブルム登頂後、雪崩の突風でベースキャンプのテントごと飛ばされ、事故死されたとのニュースを知り、同じ時期に私もカラコルムにいたので感慨を覚える。そういえばイスラマバード空港で足にギブスをはめていた明らかに登山者という日本人がいたが、もしかしたら関係者だったのかも知れない。去年のエベレストでも私が行った時期に難波さんが遭難死したが、私が行く山域で何故か事故が起きるように感じるのは、単なる偶然なのだろうか。何か不思議である。やはり私には何かハプニングがついてまわってくるのか……？？？。

今回カラコルムで事故死された方々に、謹んでお悔みを申し上げます。

また今回は旅の楽しさ、刹那さ、寂びしさが凄くわかった感じがしました。ハードな山もそれはそれで良いのですが、最近何故、日本の山じゃなく海外トレッキングなんかに行くかというと、異国の人との交流、異文化、習慣の違いなんかを体験するのが凄く楽しいのです。本当はこんな事が自分には合っているのかなと、見直す転機になった気がする山行でした。

では、これにて楽しかったデイラン・ラカポシトレッキングの山行報告を終了いたします。

８／２０
　ハバクンド発(8:00)－タガファリ着(10:25)
８／２１
　タガファリ発(8:45)－ミナビン着(14:35～16:00)－フンザ着(17:25)
８／２２
　フンザ発(8:15)－ベッシャム着(18:30)
８／２３
　ベッシャム発(7:30)－ラーワルピンディ着(18:25)
８／２４
　ホテル発(4:30)－イスラマバード空港着(5:00)
　－PK852・イスラマバード発(8:45)
　－成田空港着(21:55)

（生井　記）

はじめちゃんの想い出日記《Part1》

（御神楽山塊前ケ岳南壁（霧来沢奥壁））

１０年ひと昔と言いますが、ふた昔前のふる～い登攀記録を机の引出しから引張り出し、会報に発表するのは面映ゆい気がしますがお許し下さい。

目を覚ますと薄い霧に包まれ、周りの牧歌的な雰囲気と共に一瞬メルヘンの世界に込んだ錯覚に陥ってしまいます。

１ケ月前にここを訪れた時には目の前を流れる霧来沢は濁流と化し、怒り、暴れ狂っていました。我々は降りしきる雨の中、霧来沢の徒渉が出来ずに呆然と濁流を見つめ、水の恐ろしさを思い知らされたのは昨日のような気がします。沢に降りて遡行して行くと、沢幅一面に岩床が広がり清流が洗う様に流れている所が出て来る。その上を水に濡れながら登って行くのが実に気持ちがよい。更に登るとコバルト色をした岩の間を清流がくねって流れている所が出てきた。その清流を跨ぐようにしに左にと遡って行くと突然目の前に岩壁が現れてきた。霧来沢奥壁の登場だ。

第一スラブから第八スラブまでの広がりは圧巻である。今日は絶好の登攀日和なので２パーティに分かれて第５スラブと第６スラブを登る予定で左俣に入っていった。ゴルジを抜けるとそこが第５スラブの取付きらしいので登攀用具を身に付け、本図、鯉河、長浜の３名が第５スラブを、木村、西村が第６スラブとに分かれ、上での再会を約束して登攀を開始した。岩は乾いており、ホールド、スタンスが豊富なのでノーザイルで登る事にし、魚のウロコの様なフレーク状のスラブを右に左にと攀じる事が出来る。しかし、ルートファインディングを誤ると進退窮まる事があるので充分な注意が必要である。ノーザイルで順調に攀じるので膨ら脛が痛くなるが実に爽快だ。岩は硬く落石の心配も無く、岩登り醍醐味が満喫出来る登高だ。取付きから１時間位登ったので第５スラブパーティの様子を見る為に５、６の中間リッジに立って第５スラブを覗くと、本図パーティが大休止しているのでコールをかける。第６スラブの上部は草付が多くなるので、中間バンドを利用して第５スラブまでトラバースして合流した。ここから見上げる上部の景観は、ここが１２００ｍにも満たない高度の山とは信じられない。稜線付近の木々の紅葉と相まって岩の白さが目にく、この広大なスラブが今日は我々５人だけの世界だ。

御神楽岳・前ヶ岳南壁を登る。

御神楽岳の本当の良さは登った者にしか判らないだろう、ここには重装備の登攀用具は不要であり、先鋭的な登攀は出来ないかも知れない、しかし、遥か遠くを望む気持ちと、高みへの憧れ、未知への興味があれば充分である。御神楽岳とはそんな山だ。大休止後、更に登高を続けるとスラブが急に傾斜を増して滝状のところが出てきたが、ここでザイルを取り出し２本繋ぎあわせて約６０ｍの登攀でテラスに着く。更に上は５０ｍ位のフェースが待ちかえているが、正面は岩が脆そうなので左のリッジに取り付いた。岩は硬くホールド、スタンスは豊富で高度感があり、快適に攀じると稜線に飛び出す。会津、奥只見の連山が一望に出来、それらの山々が紅、黄に彩られ、一瞬確保を忘れてしまう程だ。かすかに付けられた踏み後を辿り、杉山ヶ崎尾根を駆けるように下りながら途中で山ブドウをヘルメット一杯取り、深まる山の秋を味わいつつ麓へと下っていった。

（木村　記）

１９７８年１０月１５日

（本図一統、木村一、鯉河仁志、長浜保行、西村隆夫）

一の倉彷徨（ほうこう）

１９９７．１０．８～９
パーティ　Ｌ古山正文、告広道

南稜テラスに着いたら既に先行１パーティが本谷を下って行く処であった。我々が滝沢第三スラブの滝沢下部ダイレクトルートの取り付きに着いた時に、ちょうど先行パーティが登り始めた。登攀の支度をして待つ事２時間、まだ先行のトップは２Ｐ目を登りきっていない。タイムリミットとして考えていた９時半を越えてしまったので、我々は中止。本谷を登り返しテールリッジを下った。後は温泉、茸鍋などで宴会。夜中、衝立岩にヘッ電の明りがぽつぽつと見えた（残業らしい）。

翌日、Ａ字ハングルートを登る積もりで、再び中央稜の基部に舞い戻った。滝沢第三スラブ上部に、昨日のパーティがビバークしているらしく、黄色のツエルトと人影が見えた。引き返していて良かった。Ａ字ハングルートへは、衝立スラブを渡ってアンザイレンテラスに行く途中の笹の剥がれかけた辺りから取り付いた。１Ｐ目、途中木登りと１ポイントのあぶみを使って、ビレー点。２Ｐ目、見かけより悪いスラブで、告君のペースは上がらない。更に、ルートが判らないという。越すべきハング帯は良く見えているが、そこまでのルートが崩壊しているらしい。そのうち雨が降り出してきて、みるみる内にぐっしょり濡れてきた。天気予報では天気が良くなる方向ではなっかたので、中止を決めた。しかし、告君は簡単には下りられないところまで登ってしまっていて、仕方なく懸垂用のボルトを打つように指示した。ところが、告君のハンマーは小さく”チョン・チョン・チョン”とささやく様な音しか立てないので、やたらと時間だけが過ぎて行った。ようやく打ち込んでそこから２Ｐ懸垂して取り付きに下り、テールリッジに戻った。テールリッジで登はん具をしまっていたら、中央稜を下降してきたパーティの女性の落としたティッシュの箱位の大きさの形の石の直撃を背中に受けてしまった。息ができず、しばらくうずくまってしまった。幸い打撲だけで済んだが、当り所と当り方が悪かったら、大変だったに違いない。落石を引き起こした女性も真青な泣きそうな顔で下りきた。「打撲で骨には異常がなさそうだ」と言うと、そのパーティから湿布を持ってきてくれた。皆さん、落石にはくれぐれも注意しましょう。

（古山　記）

黒伏山南壁の基部まで

１９９７．１０．１２
パーティ　Ｌ古山正文　中居康展

今回は谷川岳滝沢第３スラブを登攀する予定で、先発隊である古山、告パーティに一ノ倉で合流するはずであった。１１日に、仕事を終えて帰ってみると留守番電話に谷川岳は冬型の雨でとても登れる雰囲気ではないという。携帯電話に連絡を取り、急きの影響が比較的少ないかもしれないと黒伏山南壁に予定を変更した。

下館で古山さんと合流し、東北道から山形道を経由して目的地に向かう。東北道では雨に降られ、先行き不安であったが現地では少し星も見えておりテントを張って仮眠する。今回はアプローチも短いということなので少々深酒しすぎた。

朝、目が覚めると外は雨、黒伏山は深い霧の中である。どうやら冬型はこの辺りまで影響を及ぼすらしい。しばらくテントの中でごろごろしていると、少し霧が晴れてきたようなので、とりあえず取り付きまで行ってみることにした。酒が残ってしんどいが紅葉の中を登るのは気分がよい。小一時間で基部に着くが、ここで雨足が強くなり、みぞれ混じりとなったので記念写真をとって帰った。晴れていれば気分の良い登攀が出来そうだ。

山形県内は結構激しい雨だったが、福島に入る辺りからいい天気になってきた吾妻連峰などが雲に覆われ始めると、あぁ、冬が始まるなあ、なんて妙な感慨に耽り下館まで帰った。

（中居　記）

縫道石山（遠くの山シリーズ第２弾）

１９９７．１０．１０～１２

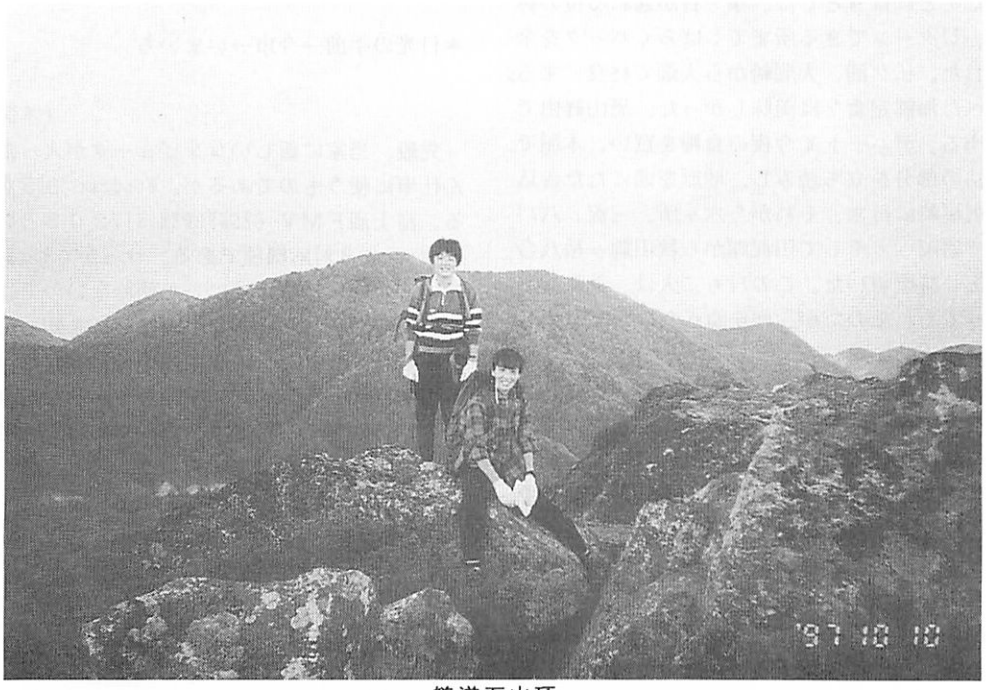
パーティ　Ｌ本図一統、村上晴美、坂本恵美子

どのくらい離れていれば遠くの山シリーズに入るのか別に定義があるわけでもなく、自分が遠くに感じたらそれに入れることにしている。この山も非常に遠く感じた山の一つである。なんせ３日間で1800ｋｍも走ってしまったんだから。

１０日雨。頂上は岩のゴツゴツした以外と広い所だった。ハァーハァー、ドキドキ、息切れと動悸が激しい。登山口から１時間弱で登ってきてしまった。空はどんよりと重い雨雲が広がり、今にもボツボツと来そうな様相だ。津軽海峡の先に見えるはずの北海道もはっきり確認できない。今、以前から一度来てみたかった、下北半島の怪峰として篤志家に有名な縫道石山の頂上にいるのだ。

思えば出発前はかなり忙しかった。縫道石山に行くと決めたときには手元に何の資料もなかった。自分の手持ちの書籍を片っ端から探したが岩場関連の記事はみつからなかった。水戸葵の武藤氏が行ったことがあるのを思い出し電話をすると、クライミングジャーナルに出ているとの事。しかし私はクライミングジャーナルを持っていなかった。嬉しいことに武藤氏は翌日コピーを自宅まで持って来てくれた。武藤氏から山の様子も聞けて、おおよそのことは分かってきた。しかし自分としては初めての山だし、まだ納得できない点もあり不充分に感じていた。白山書房に聞いてみるが、それ以上の資料はないといわれる。クライミングジャーナルに書いている佐藤の忠さんは知り合いで、よんどころなければ忠さんに電話しようと考えていた。そうだ、坂本（昭）がインターネットをやっているんだっけ。早速坂本に電話を入れ、インターネットで聞いてくれるよう依頼する。とにかく時間がない。あと一週間しかないのだ。２～３日後から坂本よりファックスが続々入ってくる。しかし自分の満足できる物はなかった。ウ～ン日光の手前だな、と坂本に電話を入れた次の日、折り返し電話があり、旭川山岳会の人が資料を送ってくれるとメールが入っているがどうしますかと言う。間に合うかどうかギリギリだったがお願いした。その資料が届いたのは出発当日だった。それは私を満足させるに充分な物であり、２０数ページに及ぶ資料をコンビニで３人分コピーしたのは出発の直前であった。

どうしてそんなに急いで登ったのかというとそれには訳があった。村上がハイキングコースから登るだけで良いというのだ。彼女は一人でピストンすると言っていたが、他に人っ子一人いない僻地である。この僻



縫道石山頂

地に女性一人をおっ放すことは心配だ。彼女は経験技術からいうと中級者であり問題ないが、なんせ本州最北端の不案内な地である。登山道の状況も分からない。もし道にでも迷ったら大変だし、それより冬眠前の熊が恐かった。熊の餌食にさせるわけにもいかないので、３人で頂上を往復してから私と坂本が岩場に取り付くことにしたのである。山頂までノンストップの急行だったので、夜行の疲れも手伝って彼女達も相当つらかったであろう。

頂上は風がありけっこう寒い。１０分も居たろうか、すぐ下山にかかる。東壁の基部で、村上と別れ、坂本と二人で西稜の取付に向かうとすぐに雨が降ってきた。大岩の下で雨宿りするも益々降りは強くなるばかり。２５分待つも止みそうもなく、岩場も濡れてしまったので本日の登攀を諦める。しかし、この坂本という女性は根性があるというか、このくらいの雨では私が登ろうと言えば喜んで登るだろう。濡れてもいやな顔ひとつしないのだ。下りて行くと夫婦らしき登山者とすれちがう。「単独の女の子と会いませんでしたか」と尋ねると、「もう車に着いている頃ですよ」という返事が返ってきた。どうやら熊の餌食にはならなかったらしい。一安心した。登山口に着くと、村上はブツブツと独り言を言いながら何やらやっていた。こういうところは面白い人間である。やがて何台かの車がやってきて頂上目指して出かけて行った。時計を見てみればまだ午前中なのだ。この雨の中ご苦労様です。

村上が１６時の気象通報で天気図を書く。私より遥かに上手で、聞くところによると、この５カ月間毎日書いているそうな。なんでも春山合宿の時、皆が天気図を見ながらあーだこーだと言っているのを見て、自分が何も分からないのが悔しくて一生懸命勉強したのだそうだ。彼女の性格を表しているような気がした。村上気象予報士の話では、明日も今日と同じく冬型で天気は悪いとのことだった。

夕方になるとほかの登山者は帰ってしまい、我々だけになってしまった。今回の食当は彼女達に任せてある。来るとき麓の集落で二人は何やら買い込んでいたが、今夜は何とか鍋（忘れた）だそうである。何とか鍋をつっつきながら酒を飲み、話が弾む。でも昨夜の長距離運転の寝不足と疲れには勝てず、早々に就寝と相成った。

１１日雨。私と坂本は早朝より出発準備を済ませるが、出ようとするとザーっと来る。それを何回か繰り返しているうち本降りになってしまう。村上気象予報士の予報はドンピシャリであった。縫道石山は諦めて、坂本希望の秋田駒ヶ岳に転戦することにする。その前に少々観光をしようと福浦に向かうが、なんと昨夜の大雨で土砂崩れが発生していて通れない。直撃を食らわなかったことにほっとした。車一台が通れる位の林道なので、Ｕターンできる所までしばらくバックを余儀なくされた。仏ケ浦、大間崎から大畑で昼食にする。ここで食べた海鮮定食？は美味しかった。恐山経由でむつ市に出る。デパートで今夜の食糧を買い、本屋で秋田駒ヶ岳の部分を立ち読みし、地形を頭にたたき込む。まず尻屋崎に行き、それから六ヶ所、三沢、八戸から高速で盛岡へ、そして田沢湖から秋田駒ヶ岳八合目には夜１０時頃着いた。この日も二人は、美味しいものを作ってくれたのだが、何を食べたのか忘れてしまった。申し訳ない。

１２日雪。目が覚めると辺り一面真っ白でビックリ。新雪が３センチ積もっており、今もどんどん降っている。我々の装備といったら、登攀用具にズックしかない。この装備では頂上アタックはとても無理なので下山することにした。乳頭温泉孫六の湯に入り帰路につく。半端な走行距離ではないので運転も全員交代でやった。両女史とも頑張って運転してくれた。

縫道石山の岩場は近々またアタックする予定である。同行希望の方は早めに連絡下さい。先着順に受付ます。定員になり次第締め切ります。

登山口(8:08)－縫道石山頂上(9:02)－東壁基部(9:34~10:00)－登山口(10:30)

＊日光の手前→今市→いまいち

（本図　記）

先般、当家に新しいコンピュータが入った。もちろん仕事に使うものであるが、Windows ９５が入っている。富士通ＦＭＶ DESKPOWER SIV２０５という機械でWindows９８対応機種である。せっかくWindowsが入っているのに、仕事だけにしか使わないのではもったいない。今回インターネットの便利さを知ったので俺も始める気になった。いま勉強中である。この会報が出る頃にはメールアドレスを開設できるだろうか。私のアドレスは・・・・・・・・です、な～んてね。今度インターネットでもみなさま宜しくね。

両神山塊　狩倉岳

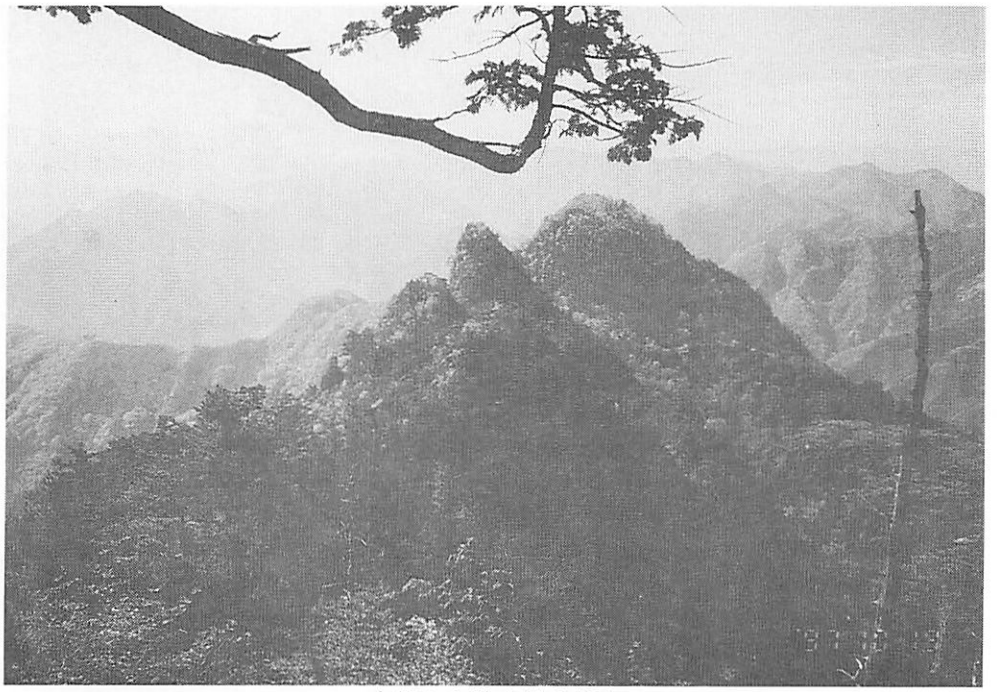
１９９７．１０．１９

パーティ　Ｌ本図一統、村上晴美、高木博行

前夜、中津川沿いの登山口にて車中、小宴会を行う。宴会後、高木は外で寝るが朝、日が昇ると明るくて寝ていられない。しょうがなく中津川沿いの林道を散歩しながらイワナの魚影を探す。冷たい水の中イワナは元気に泳いでいる。車に戻ると本図さん達はまだ熟睡しているので起こしては悪いと思い朝食を食べたり、ストレッチングをしたりして時間を潰す。本図さんの事だから余裕で寝ているのだろうと思ったら寝過ごしてしまったらしい。少し予定より出発が遅れたがコースタイムは縮められるだろう、まだ余裕だ。中津川支流石舟沢沿いの山道を進むと二股に着く。ルートは右股だがここは寄り道をして左股に見える石舟を見物する。石灰岩が水流で磨かれた滑滝で巨大な舟のような形をしている。石舟を後にし、右股を黄ペンキ印に導かれ進むがどこかで見失ってしまった。かまわず進むがルートを外れ大峠には出ず支尾根に出てしまいまた時間をロスしてしまった。黄ペンキ印や踏み跡を探しながらもキノコを探していた自分のミスだ。反省。だいぶ時間が遅れたが両神山への登山道へ出る。小休止の後、両神山の手前の尾根に入ると登山道はなく行く手に狩倉槍が鋭く秋空に突き立っている。岩稜を進むがコースガイドに書かれているほど難しいところは無いようだ。途中、岩峰の頂上で昼食をとるが天気も良く遠くの山々まで見渡せ秋山の美しさを満喫できた。狩倉岳頂上より先はだんだんに岩場は無くなり、ヤブや泥壁になる。土や落ち葉の所で村上さんは足が滑り苦労している。テニスシューズなので滑るらしい。だんだんに日も傾いてきたが本図さんがいるので安心、余裕でキノコを探しながら進むがとうとう暗くなってしまいヘッドランプ着用で降り始める。途中何度かルートが分からず、行ったり来たりしたがやがて下方に車のヘッドライトが見えひと安心、ビバークせずに済みそうだ。最後は落石防止の金網の上から車道へ懸垂下降のオマケ付き。今回の核心部だ！暗い夜道を車へと急いだ。

登山口(8:20)－狩倉岳(14:10)－車(19:00)

（高木　記）



大笹から狩倉槍を望む

太刀岡山・正面壁

1997．10．26
パーティ　L古山正文、笹平孝

太刀岡山に人工の練習をやりに行く事になった。車は橋の手前の車が２台ほど止められる所に停めて、テントを張った。

翌日は、天気がよく少し風が強かった。取り付くまでは、近くの橋を渡って山道を少し歩いて、山の中央付近の所からブッシュの中を登って行く。

１ピッチ目は、１０ｍしかなくてそこをフリーで行き、２ピッチ目から人工になる。下から見るとほぼ垂直に切り立っていた。アブミにまだ慣れていない私は、思うようにうまくなかった。途中で、古山さんにヌンチャックを使い過ぎだと言われて確認してみると連続してヌンチャックを掛けてきたので、手持ちがなくなっていた。アブミの調整も悪かったので、ボルトに手が届かなかったりして松の木の所に来るまでに大分時間を掛けてしまった。３ピッチ目は、慣れてきたので、２ピッチ目よりうまく登れた。

頂上に出ると、人工の練習の出来るオキの刃先とトマの刃先がある。古山さんに進められたが、気力がなくなっていたので遠慮した。

（笹平　記）

笛吹川東沢釜の沢

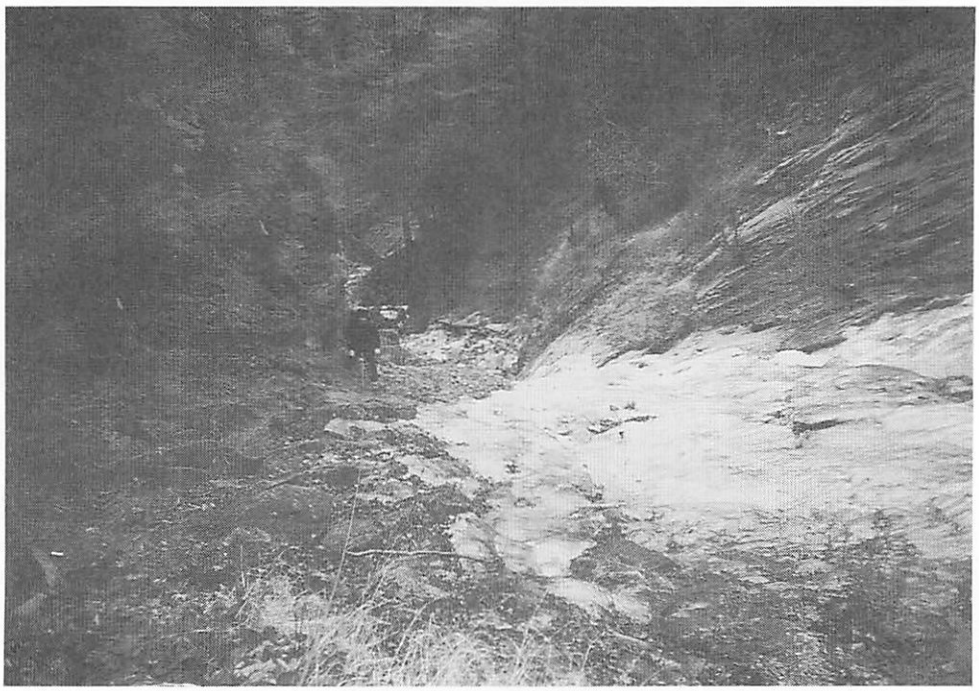
1997．11．2～3
パーティ　L本図一統、坂本恵美子

人込みを縫って登山道に入るとすぐに広い川原に出た。川原ではキャンプをしている人たちがいて、それはこの辺りの紅葉も手伝って気持ち良さそうに映った。

沢は川原から滝、釜、ナメ、ゴルジュと表情を変える。３時間ほどの所で大きめのナメがあった。浅い水の流れの中、ナメ板を歩くのは気持ちが良い。沢登りをしたことがなかった頃、私の想像するものはこれだった。沢登りというのはナメ板を滑らないように歩いたりするんだな、と思っていた。頭の中にはナメしかなかった。

ビバーク地には２時に到着。その辺りでは水も凍ってツララとなっていた。

中央高速を走っていると甲府辺りで笛吹川に気づく。あんななんて事のない川も山まで辿ると面白くなる。



東沢の凍った滝を登る

ちょっと、得した気分だ。

１１月２日甲武信岳
駐車場(7:30)－金山沢出合(10:18)－両門の滝(11:01~11:52)－１０ｍナメ滝(13:18~13:31)－３０ｍナメ滝下(13:58)

１１月３日
ビバーク地(6:38)－甲武信小屋(7:43)－甲武信岳(7:57)－甲武信岳小屋(8:18)－木賊山(8:32)－林道(10:49)－駐車場(11:15)

（坂本(恵)　記）

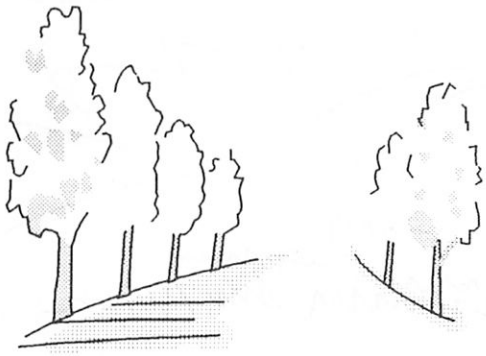
瑞牆山・十一面岩正面壁・春一番ルート

１９９７．１１．３
パーティ　Ｌ古山正文、紺野哲夫

今回は、瑞牆山に行って来ました、とは言っても三ヶ月ほど前の事なので記憶を思い出し思い出し書いてみます。確かこの時は下館市役所に集合して古山さんと二人でいつものルートで佐久へと向かいました。ここから瑞牆山周辺へと向かった訳ですが、何処をどう通って行ったのか僕にはよく分からないので省略します。そして瑞牆山周辺に着いたのですが、ここで迷走してしまう。ここの周辺の概念図を元に走っていたのですがどうも様子が違い、新しい道やキャンプ場などが出来ていてよく分からない、おおよその場に車を止めて明るくなってから確認する事にしました。

翌朝、起きたのですがなかなか体が動かない。古山さんも『眠いよ～』を連発していた。それに乗じて僕ももう一眠りする。やっと動き出しても古山さんは、登攀意欲ゼロだよ、“ははは－”と笑っていた。僕にはその言葉の笑いがとても謎めいて聞こえた。僕は何時でも寝られる状態の体を動かし準備をしていた。そんなこんなでも七時半には出発する。僕は取り着き点まではすぐなのかと思ってたのですが、とんだ勘違いで二時間ほど歩き、高度も五百メーターほど上がっていた。およそ九時半ごろ登攀を開始する。１ピッチ目古山さんがトップで続いて上るが、僕はいきなり苦戦する。フリーのところでどうも体をぐいっと上げる気になれない。上がった瞬間にズリッと行きそうな感じがする。おまけにナッツを外すのにずいぶんと苦労して手はパンパンだった、休み休みで何とか古山さんの所に辿り着く。２ピッチ目は短い所で古山さんの指導のもとトップで上る。途中にハングの下を横に行く所がありハーケンが上向きに刺さっていた、僕には不安だったがこうゆうのはよくあることらしい。そんな事も知らずにグラグラのハーケンにのっていたらしい、後で古山さんに『あのハーケンによく乗ったね』といわれるまで全然わからなかった。ビレー点の手前でフリーなるのですがどうもアブミをとることが出来ずに悩んでしまう。ここの上がすぐビレー点なので残置して登る。その後で古山さんの回収方法を見てなるほどなと思った。ここから２ピッチ古山さんがトップで行き、３ピッチ目ロープ裁きの頭の使い方を目の前見た。４ピッチ目フレンズの使い方を見た。このピッチになると僕ばもうフットホールド（スタンス？）はズリズリで無理矢理登っている感じだった、最後はフレンズを回収出来ずに引き上げてもらった。ここまで約三時半。途中ですが今回はここまでとし登攀終了。秋空の田園風景を眺めながらパンをかじる。最初の下の方の日陰では、手がかじかんでいたがいつの間にか上着を脱いでいた。今日は、この時期にしては暖かい一日だったようだ。ここから下り、約１時間で車に戻った。

（紺野　記）



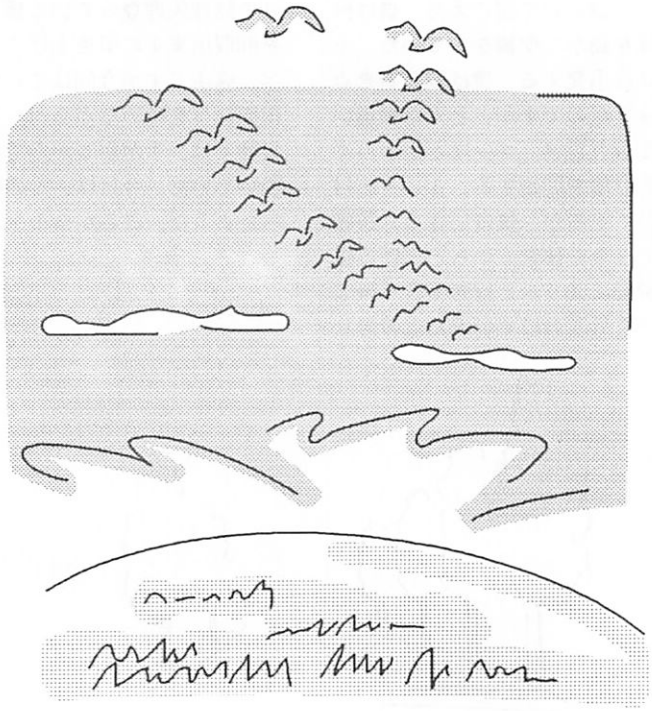
戸台川～千丈が岳

１９９７．１２．２０－２１
パーティ　Ｌ古山正文、中居康展

戸台口の戸台川の河原に車を止めて、そこから歩き出す。丹渓山荘までは川沿いの道を進み、途中一回の休みで着いた。そこから、本谷へ進むが、途中右岸に見えるはずの、舞姫の滝や七丈の滝はほとんど氷結していない。だいぶ心配になってきた。結局本谷の滝は完全に氷結していなかった。ここが本谷の一番おいしいところなのだが。この滝は、滝のしぶきが氷って下部にΔ状の氷が発達しないと登れない。この滝に右からはいる無名のナメ滝の方が割と凍っていた。登はん意欲をなくして、下山。八ガ岳への転向など考えたが、結局千丈が岳に行ってみることにした。丹渓山荘に登はん具をデポして北沢峠への急登の登山道を登り、対岸のスーパー林道と同じくらいの高さに達すると緩やかになり、太平山荘前の車道にでて、それを北沢峠に進む。峠のテント場にツエルトを張ってビバーク。翌朝、ヘッ電を点灯して登り始める。先行パーティがいるようで、トレールがしっかりとついていた。小千丈から千丈は遥か彼方に見えた。それでも１０時過ぎには山頂に着いた。快晴で風も弱く絶好の登山となった。あとは、来た道を一気に下山。

２０日　戸台口(8:00)－丹渓山荘(10:00)－滝(11:30)－丹渓山荘(13:00)－北沢峠(16:00)
２１日　北沢峠(6:00)－千丈が岳(10:15)－戸台口(16:00)

（古山記）

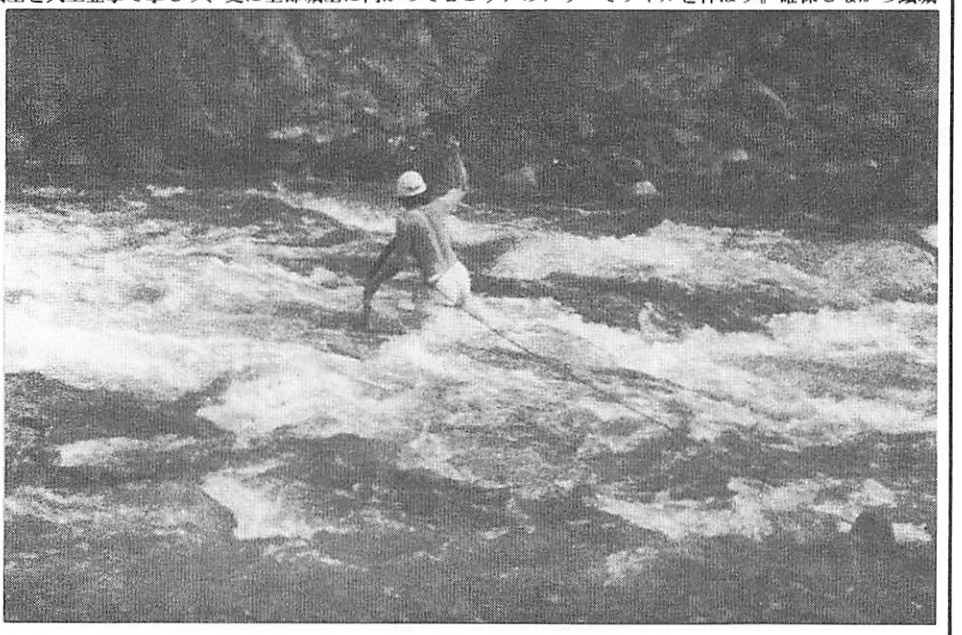


はじめちゃんの想い出日記《part2》

（明星山南壁ダイレクトルート）

我ながら自分のいい加減さにはあきれてしまいます。今回も最初の計画では黒部丸山東壁のダイレクトルートを攀じる計画でした。しかし、黒部の谷は我々に笑顔を見せてくれませんでした。降りしきる雨を避けて雨宿りに入った蔵ノ助谷出合い付近の岩小屋の中で、明星山南壁の事が話題になり、その場で計画が明星山南壁の登攀に変更になった。雲の切れ間から顔を覗かせた丸山東壁はうっすらと雪化粧して、周りの木々の紅葉と見事なコントラストを表現し、黒部の三段染めを我々に見せてくれました。しかし、つかの間で再び厚い雲の中に隠れ、雪と雷で我々を追い返してくれた。時折激しく降りしきる雨の中、我々が小滝駅に降り立った頃には外はすっかり闇に包まれたれていた。雨が止んだのは明け方近くだが『今日はきっと登れるだろう』と相変わらず楽観的だ。小滝駅から１時間強で小滝川に降り立ったが、昨日の雨で川が増水しておりに取付く事が出来ない。パンツ１枚になり徒渉を試みるが身を切る様に水は冷たいし水流も早い。２週間前の奥鐘山西壁の事を思い出した。あの時は黒部川を欅平から遡行してたが、腰以上の徒渉の繰り返しで、その日１日はパンツ１枚でザックを背負うという格好で歩いていました。その時よりも今日は水が冷たい。それもそのはずだ遠くの山々は真白に雪化粧しているではないか。

本図リーダーが意を決してパンツ１枚で徒渉に成功。後続はボルトを埋め込んでチロリアンブリッジで対岸に渡り南壁に取付く事が出来た。１ピッチのフリーはスラブが雨に濡れていて悪く感じた。２ピッチは人工登攀でのオーバーハングの乗っ越し。３ピッチからは岩も乾き快適に攀じる事が出来る。ＡＣＣ－Ｊルートを攀じる江平・富所パーティも快適にザイルを伸ばしている。４ピッチは下部城塞を人工登攀で攀じり、更に上部城塞に向かって２ピッチのフリーでザイルを伸ばす。確保しながら頚城の山々を見ると全山紅葉に彩られ、頂はうっすらと雪化粧した姿を見せている。山々が一番美しく感じられる時だ。上部城塞付近はルートファインディングが難しく、ＡＣＣ－Ｊルートに入り込んでしまうパーティもいるのだろう。アブミが２台残置してある。上部城塞をフリーと人工登攀で越え、更に登攀を続けるとＡＣＣ－Ｊルートの洞穴ハングが目前に迫ってくる。ダイレクトルートは右側のオーバーハングを登るが、ビトンの間隔も狭く楽に登る事が出来る。更に１ピッチ登ると事実上の登攀終了なので、３ピッチのトラバースで左岩稜に出てガッチリと握手を交わす。左岩稜を少し下ると、江平・富所パーティが中央バンドから左岩稜に出て待っていてくれた。合流後そこから右のブッシュ帯にトラバースして西面のブッシュ帯を下降したが帰路は小滝川の水量も減少していた。



増水した小滝川をパンツ一つで徒渉する

今回も最初の計画とは異なった山行になってしまったが、こんな事を何回やったことだろう、反省しなくては・・・・。

（木村　記）

１９７８年１０月２２日
（本図一統、木村一）

逆・深夜鈍行（前編）

シャモニ～パリ～マドリッド～バルセロナ～マルセイユ～ローマ～ナポリ～パトラス～アテネ～イスタンブール

パーティ　中野融、鈴木勝、島村幸男　本図一統

昨今、猿岩石によるユーラシア大陸横断や、ドロンズの南北アメリカ縦断が話題になっている。すべてヒッチで行くなんて、私ももっと若かったらトライしてみたいものである。よく考えてみると彼らは二人だけの旅ではなく、スタッフも同行しているはずだ。ヤラセはないと思うけど、もしかしたら、と疑ってしまいたくなる場面もあるが、とにもかくにも完遂したんだからご立派である。

先般テレビにて深夜特急なる番組を見た。とても興味深く見入ってしまった。これは作者がユーラシア大陸横断、つまり香港、バンコック、シンガポールを経て、カルカッタからはバスを乗り継いでロンドンまで約１年をかけて旅した再現ドラマである。知る人は知っているだろうが、沢木耕太郎が書いた紀行文“深夜特急”を映像化したものである。全３部作のようだったが、私が見たのは中編と後編である。原作の“深夜特急”と比べるとテレビは映像化の為に脚色されており、原作とは幾分違う。本の方がはるかに面白いので、興味ある人には一読を薦める。

“深夜特急”には旅した年月日は書いてないが、沢木耕太郎の生年月日と旅した年齢から考えると、彼が行ったのは1973年ではないかと思われる。私は沢木耕太郎とほぼ同じルートを1970年に反対方向から走破している。ほぼ同時期に行っているので沢木耕太郎の記述に、うんそのとおり、うんごもっとも、とうなずいてしまうことばかりであった。さらに私達が泊まった同じホテルに沢木耕太郎も泊まったことがわかると、なぜか沢木耕太郎に親近感を持ってしまうのであった。ここに逆・深夜鈍行と題して私達の紀行文を書いてみたいと思う。

私は単身で大阪万博の年、つまり1970年５月２８日、横浜の大桟橋から出港した。神田さんと水島夫妻に見送りを受けながら、今は見られない紙テープ乱れ飛ぶ出港風景であった。現在廃止になってしまったシベリア航路ハバロフスク号の船上の人となった目的は、ヨーロッパアルプス登山とアジアハイウェイ完走である。

横浜～ナホトカ～ハバロフスク～モスクワ～ヨーロッパ。当時はこのルートがヨーロッパに行く一番安い方法であったのだ。当然、私は片道切符しか持っていなかった。貧乏人の私であったが、ヨーロッパアルプスを登りたいという気持ちを押さえ切れず、おやじから５０万円借金した（返さないうち、おやじは亡くなってしまったが）。当時は１ドル３６０円で、外貨持ち出し金は１０００ドルまでという制限があった。片道切符を買い、１０００ドルに交換すると５０万の金はほぼ無くなっていた。ハバロフスク号には、会社を辞めて旅に出る単独行者、フィンランドの恋人に逢いに行く青年、ヒンズーラジ登山隊（雲表クラブ、ツイ１峰登山隊）など多くの若者が乗っていた。親しくなった人達とモスクワで別れ一人ヘルシンキに向かう。ヘルシンキには中野融が待っていたのである。日本を出てから１週間後の事、１年ぶりの再会であった。

コペンハーゲンで鈴木勝と合流し、２日後夜行列車でドイツに向かう。ドイツでネパールまで走る中古車を買う予定なのである。中野と鈴木は１年前渡欧し、登山活動後コペンハーゲンで働きながら越冬し、金を貯めていたのだ。私には彼らの金をアテにして、つまりタカリながら過ごそうという汚い魂胆があったのだ。もっともこのタカリの件については、彼らも承知していたのではあるが。

ハンブルグで車を探すが、英語が通じず商談が成立しない。困り果てた私達は、鈴木の知り合いがいるジュッセルドルフに行き助けを借りる事にする。商社マンの鈴木の知り合いは当然ドイツ語ペラペラで、無事オペルカデット１０００ｃｃを１５００マルク（当時約１５万円）で買うことが出来た。

日本～ソ連～北欧～ヨーロッパ～登山活動～シャモニ出発までの間にも様々な事があったが、今回は逆・深夜鈍行という題名なので、これらは又の機会があったら発表させて戴く事にして、この区間は要所要所だけの記述にさせて戴く。

約３カ月に渡りフランス、ドイツ、スイス、オーストリア、イタリアの山々を観光交えて登り歩き、９月上旬登山活動を終了する。いよいよ今回の旅、第２の目標であるアジアハイウエイ完走に出発である。メンバーは中野融、鈴木勝、自動車整備の経験を持っているので、強引に誘った島村幸男、それに私の４名であった。島村は昨冬、アイガー北壁ジョンハーリンルー

ト冬期初登を成し遂げた山学同志会の隊員であり、シャモニでは我々と半共同生活を送っていた。ただ完走するだけではなく一応目的も持っていた。ノアの方舟で有名なトルコのアララットに登る。イランのアラムクーという山のグランドジョラスに似た大岩壁を登り、さらにディマバンドにも登る。ネパールでは数年後のヒマラヤ遠征の偵察を兼ねたトレッキングをするというものであった（島村はこの後、山学同志会のアンナプルナ登山隊の隊長として参加、登頂に成功している）。ただし、鈴木勝はイスタンブールからヨーロッパに戻り、シャモニに永住するのだと言ってきかない。島村はヨーロッパからボンベイ経由日本までの航空チケットはあるが金はないとのこと。既にヨーロッパに永住している手島氏、香取氏、関野氏、今冬グランドジョラスをねらうために残留する、星野氏をリーダーとする同志会の面々（彼らは小西政継氏、植村直己氏を加え、登攀に成功したが、全員凍傷を負うという高い代償を伴ってしまう）に見送られて、タンちゃん方程式では金はなんとかなるはず、てな調子でシャモニを出発したのである。タンちゃん方程式とは、タンちゃんが考えた計画のことをいう。

元来、私は喜怒哀楽がはっきりしていて、不満に感じたことはすぐ口に出して言う。口に出してしまうとサッパリしてしまい、後は根に残らないという性格である。それは美点であるが、トラブルを起こしやすいという欠点でもある。いくら親しい仲間でも何ヵ月も寝食を共にしていれば、必ずトラブルは起きてくる。トラブルが発生したら、その時に解決しておかなければいけない。ウヤムヤにしておくとトラブルの根が大きくなってしまうからだ。当時、私は何事も深く考えずバカになることにしていた（もともとバカではあるが）。自分がバカになればトラブルの発生は最小限に抑えられる。実際我々に大きなトラブルが起きたことはなかった。何事もなんとかなるべーの、いいかげんでシンプルで脳天気な私についたニックネームは、単純からきたタンちゃんだったのである。我々は、鈴木はマサルちゃん、中野はトオルちゃん、島村はシマちゃんと呼び合っていた。

快調にパリを目指す。ところがジジョンを過ぎ、高速道路に乗った頃からどうもエンジンの調子が悪い。やがてマルンを通過。この辺りをシャンパーニュ地方といい、ここで作られるスパーリングワインをシャンパンという。シャンパンで完走前祝いを、てな話もあったがこの車の調子ではね〜。騙し騙しやっとのことでパリに着いた。パリの整備工場で修理したが、エンジンのどことかが悪かったそうで３日の日数と結構高い修理代金をとられる。この時は中野と鈴木の一冬の稼ぎがあったので、余裕をもって修理代金を払うことができた。

パリ観光を終えて、次の目的地マドリッドまで一気に行くつもりで出発する。エンジンの調子は快調だった。こうして走っているとフランスの広さが身にしみて感じる。

ボルドーに入る。ここも誰もが知ってるワインの産地だ。まわりはブドー畑ばかりである。レストランで食事とワインを注文する。私が「アン・レ」と言ってミルクを注文すると、近くにいた男が笑いながら「おまえは子供か」と言う。「俺は大人だ」「じゃあなぜミルクなんか飲むんだ」「俺はワインが飲めない」「じゃあビールは」「ビールもだめだ」「ワッハッハやっぱりおまえは子供だ」。シャモニでもそうだった。アルペンストックというバーに行き、ミルクを注文すると、他の客に子供だといつもバカにされたものだ。チーズホンデュもワインが入っているから食えなかった。ところが今はどうだろう。ワインもチーズホンデュも大好きなのだ。今になって本場でワインを飲まなかったことに後悔している。

国境を過ぎ、サンセバスチャン辺りまで来た時、再び車の調子がおかしくなってきたのである。エンジンがふけないしスピードも出ない。こんどはパリの時よりもはるかに調子が悪い。バックファイアーが頻繁におきる。あのパリの修理屋は高い金をとりやがっていったい何処を直したというんだ。このままではネパールはおろかマドリッドまでも怪しくなってきた。この時の為にと仲間になってもらった自称島村特級整備士は頭を傾けるばかりである。なんとかマドリッドまで行って、また修理するほかあるまい。マドリッドに着いたのは次の日の午後であった。ユースホステルにチェックインし修理工場を探すが、なんとスペインは明日から３日間休日で工場も連休だとの事。相談の結果、スピードは出ないが走れる事は走れるので、シマちゃんの知人のいるマルセイユまでこのまま行って修理する事にする。ユースには今からリスボンやモロッコに行くんだという日本人がいた。我々にもアフリカに渡る計画もある事はあったのだが、車の故障でこの計画は消えた。マドリッドには２日間ほど滞在し、車のことを忘れゆっくり観光する事にした。

マドリッドにはパリのような華やかさはない。名所旧跡も少なく、観光客の数もパリとは比べ物にならない。でも私には食べ物が口に合うのが嬉しかった。イタリアにはラザーニャとスパゲッティがあるのでグッドだったが、他の国々の食べ物はイマイチであった。

特にユースで朝食に出るあの石鹸のようなチーズは、何としても喉を通らなかった。もっとも私達は高級レストランなどは一度も入った事が無く、いつもカフェテリヤばかりだったせいもあるかも知れないが。

スペインは荒野の大地の国である。広いばかり広くて使い物にならない土地が延々と続いていた。私はこれを土漠とよんだ。その土漠の中に一本の道と線路が平行して延びている。ＳＬがのどかに走っている。そのＳＬと競争するかのように我々の車もノロノロとバレンシアに向かった。なぜマドリッドからバルセロナに直接至る道を通らなかったかというと、山岳地帯を通るので、この状態では無理と判断したからである。バレンシアは大きな町だがそのまま通過、バルセロナに向かう。バルセロナには翌日の午後着いた。こういう旅では一つの町に着くと、まず最初にしなければならない事は宿探しである。これが案外苦痛なものなのである。ユースにすればいいじゃないかと思うかも知れないが、ユースによっては２５歳までという年齢制限があり、シマちゃんが泊まれないことがあるのだ。安く且つ車を駐車できるスペースがある所でなければいけない。市街地での野宿はなるべく避けていた。

以前イタリアではこんな事があった。ある町でユースに行ったら、昨日で今年の営業は終了した旨の張り紙がしてあった。時間も遅いし野宿しようかと相談していたら、中年男性が通りかかり、どうかしたのかと言う。今晩泊まる所がないので野宿しようと思っていると言ったら、その男性はしばらく考えた末、野宿は危険だ、俺について来いと言う。いつものようになるようになるべ、と、ついて行くことにした。自分の家に連れて行くつもりなのかと思ったが、着いた所は修道院のようだった。男性は神父らしき人となにやら話していたが、やがてニコニコして「ＯＫ、君たちはここに泊まりなさい。よい旅を、じゃあな」と言って去って行った。神父の部屋に案内された私達に、「何処から来たか」「目的は何か」「これから何処に行くのか」などを聞かれた。我々が登山者だとわかると話は続く。「イタリアの山は登ったか？」「ドロミテを登りました」「ほう、イタリアの山はいいか？」「素晴らしいです」「日本には山はないのか？」「あるけどあまり高くないです」「チェルビーノは登ったか？」「チェ‥‥チェル‥‥チェルビーノ‥‥ハテ何処だっけ‥‥ああそうだマッターホルンのことだっけ、いいえ、これから登るつもりです」「そうか、それはグッドだ、ところで今夜は遅いので食事はなくなってしまった。泊まる部屋は大部屋でよいか？」「はい結構です」。通された部屋は１０人以上の大部屋で、同部屋の青年達に大歓迎された。夜中、日伊親善交流が始まり大騒ぎになった。青年の中に一人だけ少し英語を話せる者がいた。こっちも英語はだめだから意志疎通は十分といえないが、ジェスチャーで殆どのことはわかった。「柔道できるか？」「空手できるか？」。鈴木は空手の経験があり、私は柔道初段である。「オブコース」。すると青年達はベッドを退かし、ベッドのマットを外し、床にならべ、さあここで教えろという。ドッタンバッタン大変な騒ぎなので寮長さんらしき人が心配して見回りにきた。他の部屋の青年達も集まってきて、日伊親善交流は夜更けまで続き楽しい一夜を過ごした。翌朝、朝食までいただき、お金を払おうとすると、いらないといって受け取らなかった。こっちに来たときはまた寄っていけよと見送りを受けながら、知っている少ないイタリア語の一つ、グラッチェを連発、丁寧にお礼を述べて出発したのだった。

またスイスではこんなこともあった。チューリッヒに着くのが夜になってしまい、公園で野宿することにした。夜中二人のポリスが警らしてきた。ホームレスと思ったのか何やら声をかけてきた。ここで寝ていてはいけない、と言っている。とぼけた振りをしていると、「ドゥー、ユー、スピーク、イングリッシュ？」。来た来た来た来たよー。我々には、こうなった場合の対策は既にできていた。手筈どおり「ノー」。「フランセ？」「ノー」。「ドイチェ？」「ノー、アイ、キャン、スピーク、ジャパニーズオンリー、ソー、ノーアンダスタンド」。ポリスはジェスチャーを交え何やら言っていたが、二人は顔を見合わせて、こいつらどうしようもないわ、というような顔をして帰って行った。それ以来、市街地での野宿はしないようにしていたのである。

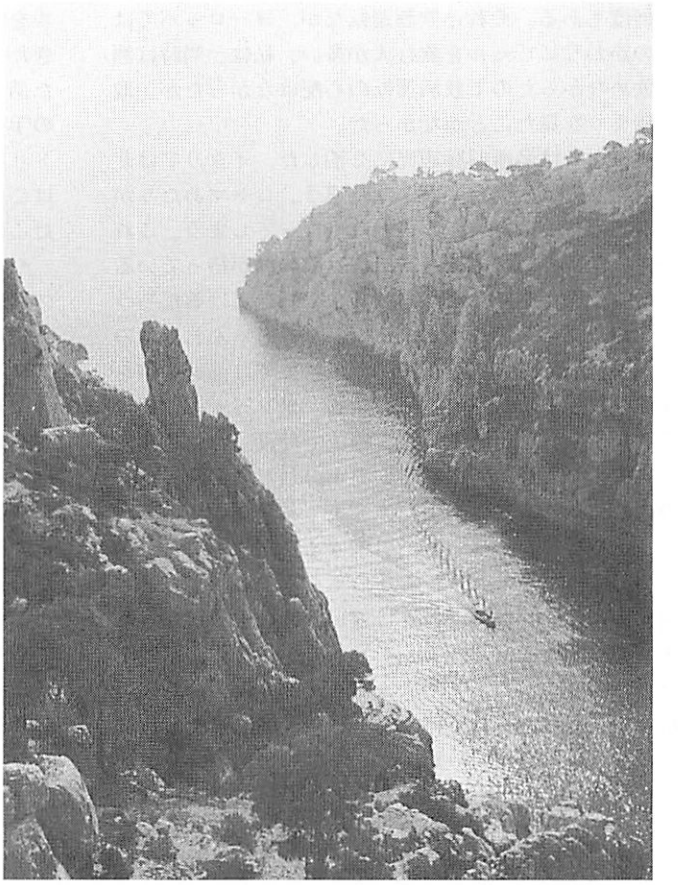
バルセロナでは一人１７５ペセタを払い闘牛を見た。スペインの人々は熱狂的で、どうしてこんな闘牛であんなに熱狂できるのか不思議に感じた。考えてみれば残酷なものである。牛は闘牛場に出る寸前に釘のようなものを背中に刺される。牛が怒ったところで闘牛場に放されるわけだから牛はマタドールに向かって突っ込んで行く。マタドールはそれをヒラリヒラリとかわし、一通りのスタイルをこなしていく。さんざん挑発し、いじめたあげく、最後は刃渡り１ｍ位の刀で心臓を背中から一突きにする。それも刀を刺すタイミングが重要で、牛がマタドールめがけて突っ込んできた瞬間に、マタドールはそれを避けながら刺すのである。見事心臓を一突きにできると、牛は即死しバタンと倒れる。観客は拍手喝采し、マタドールはその牛の耳を切って観客に投げる。心臓に刺さらず牛が死なないと

ブーイングが起こる。日本の捕鯨には世界中から残酷だと非難をあびるが、なぜ闘牛は非難をあびないのか釈然としないものを感じた。

スペインは夜更かしの国でもある。夜１０時頃になっても子供達が表で遊んでいる。我々もスペイン最後の夜を遅くまで楽しんだ。しかし残念ながら本場のフラメンコは懐状態の理由から見ることを諦めざるをえなかった。

バルセロナからマルセイユに至る道は素晴らしいドライブコースだ。車もなんとかマルセイユまで行ける見通しがついたので、ゆっくり景色を眺めながら行く、というかスピードが出ないのでゆっくり行くほかない。途中、追突されるという事故にも遇うが、事なきを得た。なるほどあちらの連中はバンパーにキズがついたくらいでは謝りもしない。こちらも仏語はボンジュール、メルシー、トレビアン＋α(プラスアルファ)くらいしか知らない。とても交渉するほどの語学力がないので「ノープロブレム」と言って勘弁してやった。

マルセイユのユースに宿を取った私達は、早速シマちゃんの知人の紹介で修理工場に車を出した。修理には３日かかるという。ある日、ガストンレビュファの映画“天と地の間に”に出てくるカランクの岩場に行った。ここは紺碧の海から数百mの真っ白い石灰岩がそそり立っている絶景地である。昔でいういわゆる６級ルートが何本もある。できればこの底抜けに明るい南仏に１カ月位滞在して、この岩場を登ってみたいものである。３日後、車の修理が終わった。エンジンの排気弁が３本も穴があいてしまっていた。これではスピードが出ないのも当然である。この状態でよくここまで走ってこられたものだ。修理代も目が飛び出るほど高かった。残金で果たしてアジアハイウェイを走破できるのだろうか、心配になってきた。いろいろ対策が練られた。物価の高いヨーロッパには必要以上に滞在せず、一日も早く物価の安い中近東に行く。島村は○氏に日本に届けてくれるよう預かった３００ドルを借りる。食事はなるべく安いもので済ませる。ホテルは安いところを探し、野宿も積極的に実行する、などなどである。決まったらマルセイユに長居は無用、明日出発とする。



カランクの岩場

高級リゾート地、コートダジュールとして有名なニースやモナコは車内から見ただけで通過、ジェノバを経てピサの斜塔を見学、フィレンツェに着く。フィレンツェでは１泊、名所巡りの一般観光をし、ローマに向かう。

私はコルチナ・タンペッツオに行きたかったが諦めるほかなかった。実はシャモニの登山シーズンが始まる前にドロミテとベネチアに行った。そのとき通ったコルチナ・タンペッツオの素晴らしさに、是非もう一度行ってみたいと思っていたのである。

高速道路を南進する。イタリアの高速道路はドイツのアウトバーンと違って有料である。アウトバーンにスピード制限はないがイタリアの高速道路にはある。アウトバーンの出来は見事というほかない。有事のときはセンターのグリーンベルトをはずし、飛行機の離着陸もできるという。高速道路ではないが、スイスなどは国境近くの岩に無数の穴が空いている。はじめ何でだか分からなかったが、やはり有事の際ダイナマイトを仕掛け、道路を遮断するのだそうだ。島国の日本とは違い、東欧と国境を接している国の緊張感がうかがえた。運転していて気がついたことでは、ヨーロッパからネパールまで運転免許証の提示を求められたことは一度もなかった。西欧諸国の国境通過にはパスポートとグリーンカード（自動車保険証）、アジア諸国ではパスポートとカルネ（無税通関手帳）だけである。だから中野、鈴木は無免許運転で国境通過したことな

ど何度もある。それと飲酒運転だが、ヨーロッパでは水のかわりにビールを飲む人が多い。私は、当時は酒が飲めなかったので飲酒運転の心配はなかったが、取り締まりを見たことがなかった。

ローマでは名所旧跡観光に２泊した。イタリアは北部と南部では生活水準がかなり違う。ローマあたりから荷物は十分に注意しないとなくなってしまう。これから先、行けば行くほど気の抜けない旅が待っているだろう。はたして無事ネパールまで行き着けるだろうか、期待と不安で一杯になるが、タンちゃんお得意のなんとかなるべーでチョン。ナポリまでは高速道路をぶっ飛ばし、ポンペイを見学する。ポンペイは、紀元７９年ブェスブィオ火山の大噴火で埋没した古代都市である。そんな大昔の都市に荷車のわだちの残った石畳の道路や、水道、浴場、遊廓まであったのには驚いた。ポンペイからは一般道を飛ばす。ブリンディシからフェリーでギリシャに渡るつもりなのだ。イタリア南部の景色は北部のそれとは違い、低い山の連なった未開発の田舎である。アルペン的な山はなく、ボサ山という感じの山であった。人家も北部とは対照的にお粗末で、何となく暗い印象をうけた。ブリンディシに着いた時には既に真っ暗で、フェリーの出る３０分前でだった。チケットを一人２０ドルで買い（車は幾らか忘れた）、諸手続きを済ませ船に乗り込むと、いくらもしないで出港した。腕時計の日付は９月２７日を指していた。船内は空いていて、リッチな雰囲気の中ゆっくり寝ることができた。近くにいた白人達とビールを飲みながら会話がはずむ。とは言うものの、ありきたりの一般的な会話はできても、ちょっと込み入った話しになるとチンプンカンプン、すぐに鈴木勝通訳の手を借りることになる。翌朝甲板に出て驚いた。アドリア海ってなんと奇麗な海なんだろう。紺碧の海とはこのことをいうんだろう。島村が、紺碧とはこの色だこの色なんだよと一人つぶやき、うなずいていた。

やがてギリシャのパトラスに着いた。オリンピアやスパルタ等ペロポネソス半島を一周する。ペロポネソス半島という所は田舎で素朴なところである。なぜかイタリア南部のような貧しさは感じられなかった。でもそれは私の独断と偏見で、イタリア南部ではたまたまそのような所を見てしまっただけだと思うのであるが。ユースも静かで良かった。テラスの机で、これからアジアに入る旨と、連絡先は各国にある日本大使館止で手紙をくれるよう家族と友人に手紙を書いた。私が書いているのを見てサウジの青年に声をかけられた。日本の字は面白いという。彼の名前をカタカナで教えてやり、私の名前をアラビア文字で書いてもらった。

コリントス地峡には驚いた。ここにはエーゲ海とアドリア海を結ぶ運河が作られているのだが、長さはそんなでないものの深さがすごい。黒部の大ゴルジュの底に中型船がやっと通れる運河があるという感じである。よくこんなものを人工的に作ったものだ。

アテネでは観光のほか、やることがいくつかあった。財政が緊迫しているので、最悪な状態でも日本に帰れるよう、ニューデリーから日本までの飛行機のチケッ

エーゲ海岸を走る。車は愛車 ♡ オペル１０００ＧＴ

トを買っておくこと。イランのビザを取っておくことなどであった。通過各国のビザは手前の国で取るようにし、ビザが発行されるまでの待機日を観光にあてる。アララットとディマバンドの登山は断念することも決めた。飛行機（ＪＡＬ）のチケットを買うと、私の残金は限りなく０に近い状態だったのである。愛車のトランクにはギッチリと登山用具が積まれている。これが無駄にならないことを祈るだけだ。

アテネに着いて嬉しいことがあった。それはかわいい女の子が多いのである。日本人好みの顔をしている。思い出してみればこうだった。暗いソビエト連邦を抜け出し、北欧に入ったら空が明るく感じた。それは自由主義国に来たということと、女の子が奇麗だったからである。金髪の女の子はすべて奇麗に見えたのだ。俺も金髪の女の子と結婚して、こっちに永住したいなどと考えたものだ。しかし４ケ月も住んでいると、かわいい子とそうでない子の区別がつくようになってくるのだ。ギリシャに金髪はいないが、そのように多少肥えてきた目で見てかわいい子が多いのであった。

アテネ観光を終えた我々はイスタンブールを目指した。テッサロニキは大きな町だったが、駅前に車を止め、少しブラブラしながら食事をしただけで通過する。目指すはイスタンブールだ、行け、行け。時々海沿いを通る。誰かが言った「真珠をお土産に買いたいな」「真珠安いの」「産地らしいよ」「へぇー」「有名だろうよ」「エーゲ海の真珠って言うんだろ」「なんだ知ってんのか」「誰だって知ってるよ、誰か言い出すと思っていたんだよ」ワッハッハ。そうなのだ、右手に見える海がエーゲ海なのである。途中の広場で野宿とする。この通りは交通量が少なくよく眠れた。野宿には誰が決めたという訳ではないが、ある決まりがあった。それは絶対テントを張らないことと、車のそばに寝られないような所では野宿しないこと。それは目立つし、非常の場合すぐに脱出できないからである。雨の日は不快だから野宿せず、早めに宿を探すこと。貴重品は肌身離さず寝ること。おいはぎに逢ったとき全部持っていかれないように金は３つに分けて持つことなどである。最も私は無一文だし貴重品といえる物はパスポートくらいしか無かったが。

翌日アレクサンドロウポリスという格好いい名前の町を通過、国境近くを知る。国境は川になっており、一本の橋があるだけで、あとは何も無いところである。ギリシャとトルコはキプロスの領有権をめぐって紛争を起こしたこともあり、今でも仲が悪い。橋の真ん中に線が引いてあり、この線は橋の両端から測ると、おそらく１ミリとずれていないんではないだろうか。この線の傍らには電話ボックス位の検問所があって、ギリシャ側とトルコ側にそれぞれ遮断機がある。鉄砲を持った両国の兵士らしき人が、お互い睨みをきかしているといった雰囲気である。いよいよ政情不安地帯に入ってきた感がし、緊張すると同時に面白くなってきたようだ。国境通過も今までのようにパスポートとグリーンカードを提示すればよいのではなく、パスポートとカルネ（どんな物か後編で説明する）、それからイミグレーションオフィスで必要書類に記載し、通関手続きをしなければならない。荷物の検査もあり時間がかかるようになってきた。

５日間滞在したギリシャからトルコに入ると、道は簡易舗装の感じでだいぶ悪くなってきた。これから先が思いやられる。すぐ先の小さい町からは乗合の長距離バスがたくさん出ており、客引きが忙しい。バスといってもほとんどマイクロバスである。車を持っている人が勝手に個人営業しているように見えた。日本でいういわゆる白タクといった感じである。このバスがかなり飛ばしてイスタンブールに向かうのには驚いた。しかしあとでわかるのだが、トルコは良い方でこの先の国々では、正に暴走といった方が相応しい交通状況になるのだが。

イスタンブールには１０月２日の夕方到着した。イスタンブールの象徴ともいうべきブルーモスクの６本の塔が何処からでも見える。そうか、トルコは回教徒の国なんだっけ。この先パキスタンまではコーランを聞きながらの旅になるんだろうな。ギリシャとの紛争も一種の宗教戦争なのだろう。トルコではＨＯＴＥＬという看板を見ない（当時は）。ホテルではなくオテルなのだ。ＯＴＥＬという看板がホテルである事はすぐに見当がついた。イスタンブールはとても活気のある町である。悪く言えば騒々しい町なのだ。クラクションは鳴りっぱなし、排気ガスはモーモー、マフラーは付いているのかいないのかバリバリと音をたてて走る。バンパーはブラブラ、車体はベコベコである。いつ壊れても不思議のない車ばかりだ。我が愛車（通称オペル１０００ＧＴ）は、トルコでは程度の良い車である。交通ルールは図々しい者優先だ。市場はバザールの雰囲気が出てきた。有名なグランドバザールにも行ってみた。売っている貴金属はすべて偽物に見えてしまう。こちらは買うつもりもないし、相手も俺たちの風体を見れば客かどうかがわかる。

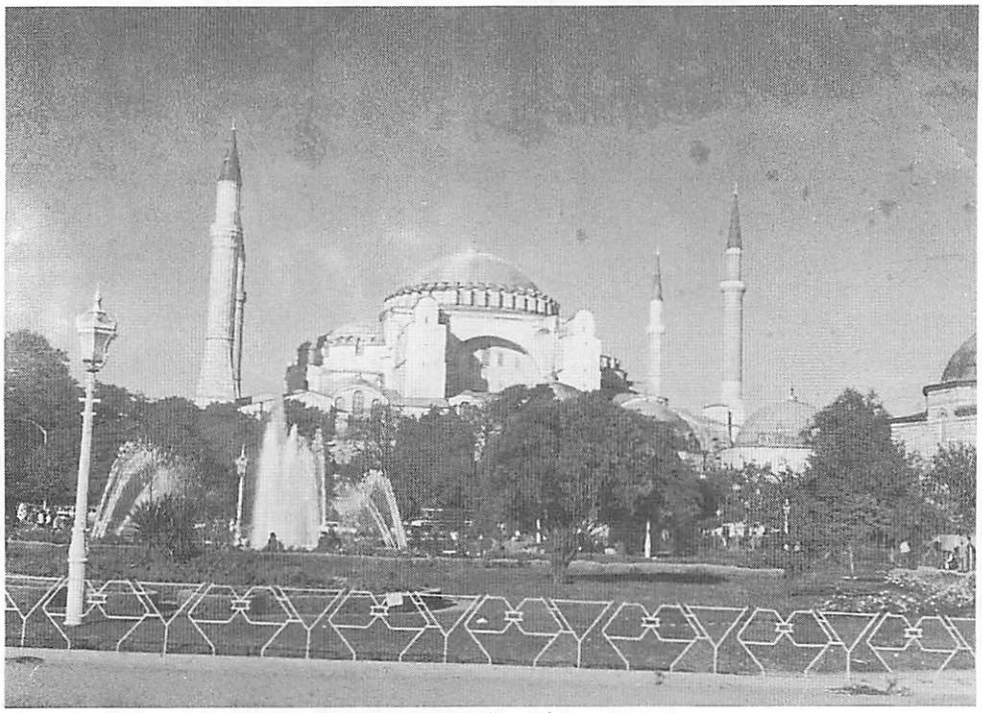
『お兄さん達、まけとくから店ごと買ってくれないか』などと冗談を言ってくる。言葉が良く通じないのが、お互い好き勝手な事が言えて又楽しい。指を差して

『カチ・リラ？（いくらだい）』

『○×リラだよ』
『バハル！（たかいじゃねえか）』。
物を買うときはこの言葉から始まる。相手の言う値段で買ってはいけない。必ず値切ることだ。それも交渉に時間をかけなければいけない。時間をかけないとこちらが負ける。たまに相手の言った値段で買おうとすると、あまりふっかけたことに良心がとがめるのだろうか、向こうからまけてくれることもある。こうして我々は徐々に鍛えられていく。店をひやかしながら歩くのも結構楽しいものだ。沢木の深夜特急には“はなもち氏”という日本語が話せるトルコ人と会ったと書いてあるが、この市場にはカタコト日本語で「こんにちは」とか「にっぽんじんですか」と、よく声をかけられる。まさか沢木のように“あなた、はなもちですね”と声をかけられた事はなかったが、非常に親日的なのだ。何故なのだろうか。当時、日本人観光客が来るとは考えられなかったのに。ブールは東洋文明と西洋文明が交じり合った、何ともエキゾチックな町である。昨日のテッサロニキと比べると何十年もタイムスリップした感がする。いよいよアジア圏に入ってきたのだ。

翌日歩いていると男が声をかけてきた。ドルを交換しないかと言う。レートを聞くと銀行よりもかなりいい。トルコにもブラックマーケットがあるのかと思い、交換することにした。インチキされないように車の後部座席に乗せ、両脇に我々が座った。男は片手に新聞紙を持っていた。１ドル紙幣を出すと男はそれを手に取り裏表を丹念に調べている。偽ドルかも知れないので別な紙幣を見せろという。さらにもっと大きな紙幣も見せろと言う。２０ドル紙幣を出したが、紙幣を折り曲げたり裏表を見ていて、これは偽ドルだから交換しないと言い出した。私達４人は、これは怪しいと睨んでいたので、ごまかされないように手元を凝視していた。インチキした様子もないし、枚数を数えると合っていたので男を車から降ろした。その瞬間男は走って逃げ出したのである。え、なんだなんだと紙幣を調べてみると、見事２０ドル紙幣と１ドル紙幣を交換されていたのであった。手品のような早業であった。あの新聞紙の中に１ドル紙幣が隠されていたのだろう。ドル紙幣はすべて大きさが同じなので、まったく気づかなかったのである。みすみす１９ドルやられてしまった。ウ～ンおぬし達なかなかやるな、スキをみせたこちらが悪かった。これからは気を引き締めていかなくてはと、痛～い洗礼を受けたのだった。気を取り直しブラブラしていると、若い男が声をかけてきた。またかと思い注意していると、学生だという。日本には非常に興味をもっていると話している。この学生は親切な人で半日ほど市街を案内してくれた。安い食堂に案内してもらいチャイを御馳走する。学生は代金を払うと言っていたが、ここは私達に払わしてくれと納得してもらった。いやなことがあった後だけに、この学生のおかげでトルコ人に対するイメージがよくなったことは事実である。

この日嬉しいことがあった。ユースにおやじから手



イスランブールの象徴‥ブルーモスク

紙がきており、なんとその中に現金３万円也が入っていたのだ。無一文の私には思いがけないプレゼントであった。一度も金送れと手紙に書いたことはなかったが、私の懐状態が想像できたのであろう。これまで自分の負担金はきちんと払っていたし、皆に金銭的な迷惑はかけていなかった。いよいよタカリの生活が始まるのかと思っていた矢先だったので非常に助かった。ヨーロッパ滞在中も友人からの手紙の中に、なんのメッセージもなくそっと現金が添えられていたりもした。その友人の心遣いに涙した。私の放浪生活は、このように多くの人に支えられて成り立っていることも事実であった。

ボスボラス海峡は黒海と地中海を結ぶ海の交通の要衝で、頻繁にフェリーが行き来して活気がある（現在は橋がかかっているとのこと）。２泊目はボスボラス海峡の向こう岸、ウスクダラという町に宿をとった。このウスクダラという地名は子供のころから知っていた。それは“ウ～スクダラはるばる尋ねてみたら～、世～にも不思議なことばかり～”といった歌があったからである。この町のことを歌ったのかどうかは定かではないが、べつに不思議なことは何も無い町であった。フェリーで渡ったすぐの所にある安宿に泊まる。

明日で４カ月以上寝食を共にしてきたマサルちゃんともお別れである。鈴木とは、コペン以来町で遊びに行く時も、山に登る時も、すべて一緒だった。英語の堪能な彼には随分と世話になった。鈴木は、日本ではＡＣＣＪではなく、グラニテクラブという山岳会に所属していた。同じクラブ員でもなく、年齢も年上の彼は、我々のリーダーとしてずっと面倒みてくれた。感謝してもしきれまい。最後の晩餐を近くの安食堂で催す。鈴木に一緒にネパールまで行こうと誘ったが、彼の意志は固かった。

翌日お互いの無事を祈って握手を交わし、フェリー乗り場まで見送りに行く。マサルちゃんはニコニコ笑って

『じゃあ又な、グッド・ラック』

と言ってクルリと背を向けた。

『バッキャロ、じゃあ又なと言ったって今度いつ会えるかわからないのに涙の一つも流せよ』

と思ったが、彼は自分の顔を我々に見られるのがイヤだった事を私にはわかっていた。鈴木の姿が小さくなるまで見送った。日付は１０月４日を指していた。

（鈴木勝はその後フランス人と結婚し、現シャモニ近郊在住）

さてこれからが本番だ。トルコを横断しアジアハイウエイを行くのだ。単語を並べるだけのデタラメ英会話３人組だが度胸は抜群。なんせトオルちゃんは１年４カ月、シマちゃんは１０カ月、タンちゃんは４カ月のヨーロッパ生活実績があるのだ。文法なんかどうでも良いのよ、自分の意思を伝えることができれば。ヒヤリング力はというと、相手は何と言っているのかわかるようになってきたのだから不思議なものである。それに必要は発明の母じゃないけど、我々には親から貰った五体満足の体があるし、ジェスチャーという最高の伝達手段があるのだ。この先、英語なんか殆ど通じないのだ。なんとかなるべーさ。そんな事より我々の最大のネックは、いくらタンちゃん方程式で計算しても、お金の絶対量が不足していたことだ。この時我々はインドで車を売却することを考えていたのだが？こうしてクレージートリオの珍道中が始まるのだった。

（後編に続く）

ここまでは逆・深夜鈍行の前座である。沢木耕太郎に言わせれば、ヨーロッパは何事も起こらないつまらない国々なのだ。イラン、アフガン、パキスタンがセミファイナルとすれば、インドがメインイベントということになる。これらの国々は100＝100とは限らず、100＝0もあり得る所なのである。何事も自分の常識通りにはいかない。水も食物も自分の衛生概念を変えなければ口に入れることはできない。貴重品をホテルのフロントに預けるなんてもってのほか。自分が１０分で済むことは３時間位かかる。それでいちいち腹を立てていたら、三日と生きてはいけないのだ。すぐに鉄砲玉の２～３発は腹に入ってしまう。イスタンブール～アンカラ～テヘラン～カブール～ラワルピンディ～デリー～カトマンズ～カルカッタ～香港～日本へのワンデルングはどうなるか。アジアハイウェイという名前ばかりの高速道路とはいったいどんな道だったのか。愛車オペル１０００ＧＴはちゃんと動いてくれたのか。金はどのようにして工面したのか。アラムクーは登れたのか。ヒマラヤトレッキングはどうなったか。ハプニングの続出する後編をお楽しみに、乞うご期待。

（本図一統）

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.150.1997.10 B5 66P 浦和浪漫山岳会
剣沢大滝完登、秋の集中丸山岳・6パーティ、苗場・釜川千倉沢横沢左俣、川内・木六山大底川赤花沢3ルンゼ、マイナールンゼ、南会津・中門沢~御神楽沢、北海道日高・ヌビナイ川右俣ほか
◎Rohman NO.151.1997.11 B5 16P 浦和浪漫山岳会
特別連載・みなみあいづ、研究集会報告・遭難対策ほか
◎わらじ NO.499 1997.10 B5 22P わらじの仲間
秋の集中二王子岳・8パーティ、中ア・太田切川東熊沢、ムスターグ・アタほか
◎わらじ NO.500 1997.11 B5 20P わらじの仲間
飯豊・蟹沢、仙ノ倉谷西ゼン、西黒沢~ナルミズ沢ほか
◎わらじ NO.501 1997.12 B5 20P わらじの仲間
奥秩父・大血川西谷ワレイワ谷、北海道日高・中の川右俣ほか
◎逍遥 NO.77 1997.10 B5 15P 逍遥渓稜会
谷川・魚野川北カドナミ沢、越後・佐梨川大チョーナ沢、奥利根・樽俣川前深沢、湯桧曽川東黒沢、万太郎本谷、仙の倉東ゼン、赤谷川笹穴沢ほか
◎逍遥 NO.78 1997.11 B5 32P 逍遥渓稜会
朝日・見附川オバラメキ沢、片品川大薙沢右俣、奥秩父・古礼沢、湯桧曽川袈裟丸沢、武尊・塗川西俣沢、片品片品根羽沢北場沢、栗子・観音堂沢ほか
◎逍遥 NO.79 1997.12 B5 22P 逍遥渓稜会
奥多摩・日原川小川谷、丹沢・キュウハ沢、奥多摩・入川谷本谷、南秋川小坂志川ウルシゲ沢左俣、妙義・入山川ホトケ沢、北ア・霞沢岳、丹沢・世附川水ノ木沢、水無川ほか
◎Next！ No.22 1997.10 B5 40P 山岳渓流釣り集団むげん
奥多摩・逆川、利根川本谷、富山・熊野川ほか
◎Next！ No.23 1997.11 B5 32P 山岳渓流釣り集団むげん
飯豊・荒川大石川東俣川、北ア・尾安谷ほか
◎Next！ No.24 1997.12 B5 22P 山岳渓流釣り集団むげん
奥利根キノコ狩り、小川山ほか
◎とまのかぜ No.59 1997.10 B5 P29 童人とまの風
安達太良・石筵川、越後・水無川西不動沢右俣、左俣、湯桧曽川ゼニイレ沢、守門岳・中の高地沢、毛猛・黒又川水頭沢、南会津、白戸川メルガま岐沢、大幽西ノ沢、谷川・一ノ倉沢四ルンゼほか
◎とまのかぜ No.60 1997.11 B5 P36 童人とまの風
谷川・白毛門沢、ケサ丸沢右俣、ゼニイレ沢、マチガ沢トンネルルンゼ、笹穴沢、南ア・黄蓮谷右俣、両神・中津川金山沢右俣、阿武隈川赤滝沢、白水沢、南沢右俣、一里滝沢、阿武隈川本谷ほか
◎とまのかぜ No.61 1997.12 B5 P10 童人とまの風
丹沢ボッカ訓練、早戸川本間沢ほか
◎山紫水明 No. 1997.10 B5 14P 山旅の会
小出川、オダッシュ山、桑原岳唐松沢、桂川ほか
◎山紫水明 No. 1997.11 B5 14P 山旅の会
成瀬川北ノ俣沢唐松沢、田代山~帝釈山、赤谷川本谷ほか
◎山紫水明 No. 1997.12 B5 4P 山旅の会
茸採り三昧ほか
◎渓游 NO.99 1997.10 B5 8P 溯行同人 渓游会
丹波高原・葛川堂ケ谷、比良・滝川タンヤマ谷、鈴鹿・野洲川元越谷、奥秩父・笛吹川釜ノ沢ほか
◎すずらん通信 NO.199 1997.10 B5 18P 鈴蘭山の会
奥沢谷事故現地調査山行、越後・北ノ又川大ビラヤス沢、広堀川入道沢、白山・境川ほか

◎すずらん通信 NO.200 1997.11 B5 10P 鈴蘭山の会
川内・今早出川ほか
◎すずらん通信 NO.201 1997.12 B5 12P 鈴蘭山の会
鳳凰三山行方不明事件についてほか
◎月報・ＺＡＣ NO.192 1997.9 B5 12P グループ・ゼフィルス
真昼山地・胆沢川小出川柏沢、奥利根・平ケ岳沢ほか
◎月報・ＺＡＣ NO.193 1997.10 B5 8P グループ・ゼフィルス
大朝日岳、南ア・尾白川本谷、上信越・大赤沢ほか

会報・記録集・報告書

◎1994年2月吾妻連峰山スキー遭難事故報告書 1997.2 B5 112P 坂根グループ友人有志
第1部・吾妻連峰山スキー遭難事故状況、第2部・遭難救助活動、第3部・総括、参考資料ほか
◎古元一弘君奥沢谷遭難事故報告書 1997.11 B5 24P 鈴蘭山の会
事故概要、事故報告、事故連絡から出発まで、救助活動状況報告、遭難救助費用会計報告、奥沢谷事故現地調査山行、事故原因と問題点、反省及び今後の対策ほか
◎年報わらじ NO.20 1997.12 B5 286P わらじの仲間
夏合宿・南アの谷7本、冬合宿・飯豊連峰2本、春の集中・荒船山1本、秋の集中・巻機山4本、サブ合宿・金城山4本、その他の会山行として訓練山行2本、新春ハイキング1本、沢登りは北海道・2本、東北・3本、会津・1本、会越・5本、越後・2本、上信越・2本、谷川・1本、奥秩父・6本、奥多摩・4本、丹沢・1本、北ア・2本、南ア・2本、屋久島・1本、雪稜雪壁は8本、岩登りは5本、山スキーは7本、縦走は積雪期17本、無雪期12本、海外の山2本など記録多数
◎わらじ40年の歩み B5 48P わらじの仲間
1957年から1997年までの記録一覧、年報わらじ1~19の総目録ほか
◎ステップ NO19 1997.10 B5 50P 日立電線体育会山岳部
黄山、吾妻連峰、尾瀬、キナバルほか
◎山水 NO23 1997.7 B5 43P 常北山水会山岳部
奥只見・大白沢、穂高岳沢、日光男体山、屋久島・宮之浦岳、雨飾山、安達太良山、尾瀬ほか

以上閲覧したい方は本図まで

≪編集後記≫

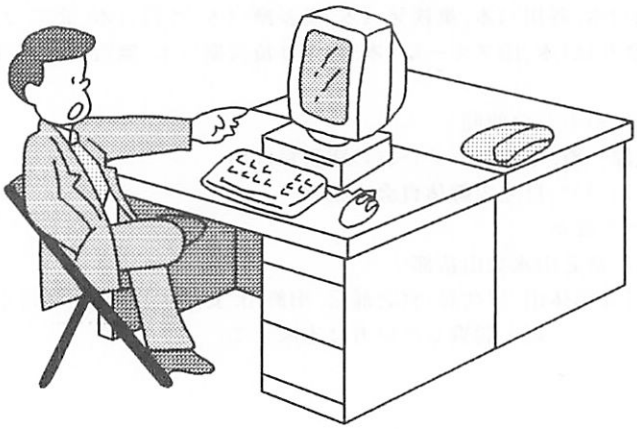
『R&V』今秋号の逆・深夜鈍行の文を読んで、私は今まで某M氏のヨーロッパ～北京までのオンボロカーでの紀行の話を何回か聞いていたが、具体的なことは、何も知らないでいた。が、今回読んでなるほどなぁと楽しく読ませてもらった。

一昨年より、テレビ番組でユーラシアヒッチハイクとか、南北アメリカヒッチハイクとかが話題に上り、私も彼らに共感を覚えずっと彼らの旅を楽しみに見ていた。今回この紀行文を読んで、以前に読んだ沢木耕太郎の「深夜特急」とか、後藤ふたばの「チベットはお好き」とか、岩合日出子の「アフリカボレボレ」とか色々なドキュメントの本を読んでいた私は、逆・深夜鈍行の物語がこれらの旅とオーバーラップして彼らと同じ人がこんな身じかにいたんだと改めて逆・深夜鈍行を読んでいて感心していた。

私も最近海外に行くようになり、どちらかと言うと発展途上国とかが気に入っている。彼らはみんな元気にたくましく生きているし、最初恐いけど話してみると格好優しいし、直ぐに仲間に入れてくれるし、旅をしていても何かが起こる気がするのである。（ツーリストだからかも知れないけどね）

某M氏の仲間も私にはうらやましかった。今の時代ではこんな仲間を作るのはまず出来ないだろうと思う（特に私には、出来ないだろうと思う）。それなので私としては後編を早く読みたいものである。

著者M氏の今後の文筆活動の活躍と続編の出筆を見守りたい。



季報［R&V］第２７号　発行１９９７年　秋
発行者：鯉 河 仁 志
発行所：ＡＣＣ－Ｊ茨城　〒３０６－０５０１　茨城県猿島郡猿島町逆井３１８
生 井 一 男 方
編集者：生 井 一 男
印刷所：やさと 印刷

Alpin Climbing Club of Japan

ACC-J茨城

岩壁，沢，冬山のクライミング集団